



文化庁
シンボルマーク

下黒田遺跡 発掘調査報告書

昭和63年3月

松江市建設部建築課
松江市教育委員会

島根県八束郡美保町大字下黒田5872-4
美保町立中央公民館
電話0852-3624

正 誤 表

	(誤)	→	(正)
P 30 下から 4 行目	離接する	→	隣接する
P 47 上から 5 行目	林・三浦 (1986)	→	林・三浦 (1987)
“ 上から 8 行目	ミソミチ	→	ミソツチ
“ 上から 16 行目	80センチメートル	→	80センチメートル
“ 上から 23 行目	三浦・林 (1986)	→	三浦・林 (1987)
P 49 上から 22 行目	アイラ T _m	→	アイラ T _n
P 54 上から 6 行目	布志名焼小碗	→	布志名焼小形碗
“ 上から 23 行目	船木与次兵衛	→	船木与次兵衛
“ 上から 28 行目	唯莫然と	→	唯漠然と
P 63 表中			
12-3, 特徴	外傾して	→	外傾して
P 71 遺物観察表(4)			
欄外の遺構区分	井戸上遺構	→	井戸状遺構
P 72 表中			
20-14, 備考	風化剥落が	→	風化剥落が
P 74 表中			
26-6, 出土箇所	覆工中	→	覆土中
26-8, 特徴	やや内し	→	やや内凹し
P 63 ~ P 76			
遺物観察表 項目	出土箇所	→	出土箇所



下黒田遺跡と正倉跡



下黒田遺跡

序

大庭十字路、松江市南郊のその交差点は万葉集にうたわれた往昔の十字路のたたずまいを今もかすかにただよわせている。道を南にとると神魂神社あるいは熊野に通じ、その昔この地方を統べた神々の鎮まります社が違っている。東に向かうとすこし道幅が狭くなって山代郷正倉跡、四王寺跡、真名井神社とつづき、よく整備された出雲国庁跡も程近い国の史蹟指定をうけた山代郷正倉跡、道をはさんでその南に松江市の市営大庭住宅があり、その建替工事に当り調査を実施して下黒田遺跡を確認した。そこでは正倉跡と軌を一にする建物倉庫跡や大溝跡が検出され前記史蹟と深く関連する古代の官衙跡として貴重である。

私たちは急きょ関係者の協議にはかり、綿密熱心に検討を重ねた末、工事の計画変更によって閉地内での現状保持が実現し、関係者一同大いによこんだ次第であった。埋蔵文化財の保護活用と地域の開発活性化とは一般に相反する目的の意識に立っている。種々の論議が集中するところでもあり、国土の広狭ないしは体制のちがいでいまでもあげつらわれるけれども、ステレオタイプの議論で事が解きほぐされるはずはない。前記下黒田遺跡の開発と埋文愛護との前向きの調和ととも、関係者一同の懸命の努力と善い意思によるものである。申してみれば必死のなかから生まれてくる人間の味の濃い智恵であろう。

如上の意味を含めてこの下黒田遺跡のレポートをどうか御高覧いただきたく、また御叱正をお願いしたいと思っている。この事業に関わって下さった方々、文化財愛護・土地開発のへだてなく御奔走をたまわった各位に衷心より敬意と謝意を申しのべて筆をおくことにする。

昭和63年3月

松江市教育委員会

教育長 内 田 榮

凡 例

1. 本書は、松江市建設部建築課の依頼を受けて、松江市教育委員会が昭和61年度に実施した市宮大庭第1住宅建替工事予定地内の下黒田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査事業の組織は次のとおりである。

調査主体者	松江市教育委員会 教育長 内田 榮		
事 務 局	社会教育課長	野津久夫	
	文化係長	岡崎雄二郎	
	文化係指導員	宇野美智子	
調査担当者	社会教育課文化係教諭 昌子寛光		
調 査 員	囑託員	錦織慶樹	
調査協力者	木村尚史 中尾秀信 寺本 康		
	庄司健太郎 佐々木稔 藤原裕子		
作 業 員	青木昭夫 石川貴章 稲田 契 伊野芳男 上野丈二		
	佐々木一夫 角 俊郎 高階智也 福田邦光 福田 醇		
	松本敏征 三島 豊 荒川清子 荒川幸子 井上豊江		
	梅原明枝 梅原伊都子 勝部京子 北垣澄子 高麗玉子		
	高梨芳美江 多久和姫子 西谷節子 福島初枝 三代俊子		
	水野千久子 水野登美枝 水野里江 柳浦正子 吉野英子		
	遺物整理員	青木 博 稲田 契 上野丈二	
	遺物整理等協力者	今岡一三 木村尚史 松浦徳子 渡辺真紀 宇野美智子	

3. 調査の実施については、次の方々の協力と指導を得た。記して感謝の意を表する次第である。

調査の実施	松江市建築課長	原田 喬 (62年3月まで)
	"	須藤發夫 (62年4月から)
住宅建築係長	内田正明 (62年3月まで)	
	"	名古田幸男 (62年4月から)
住宅建築係技師	名古田幸男 (62年3月まで)	
	"	今津光男 (62年3月まで)
"	"	小 倉 啓 二
"	"	岡本泰明

住宅管理係長 大谷 洋 (62年3月まで)

周藤 則 (62年4月から)

住宅管理係主事 陰山明子

双葉建設 (有)

福間商事 (株)

佐々木興産 (株)

調査指導

山本 清 (松江市文化財審議会会長・島根大学名誉教授)

河原純之 (文化庁記念物課主任文化財調査官)、渡辺貞幸 (島

根大学法文学部助教授)、上田正昭 (京都大学文学部教授)、

小田富士雄 (北九州市立考古博物館館長)、町田 章 (島根県

文化財保護審議会委員・奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調

査部長)、池田満雄 (島根県立松江商業高等学校教諭)、速岡

法暲 (島根県教育委員会文化課課長補佐)、永塚太郎 (同埋蔵

文化財第1係長)、松本岩雄 (同主事)、卜部吉博 (同)

遺物の検討

村上 勇 (島根県立博物館学芸課主任学芸員)

川原和人 (島根県教育委員会文化課主事)

4. 本遺跡出土の人毛状遺物・土壌の分析を次の方々をお願いした。

人毛状遺物分析 島根県警察本部刑事部科学捜査研究所

警察技師 中村博明

土壌分析 島根大学教育学部教授 三浦 清

5. 本書で使用した遺構記号は、次のとおりである。

S B・掘立柱建物跡 S K・土城

S D・溝状遺構 S E・井戸状遺構

6. 挿图中の方位(N)は、真北を示し、磁北から4°西へずれている。

7. 出土遺物の実測・浄書は昌子、今岡、青木が、遺構の浄書・遺物の写真撮影は昌子がこれをおこなった。

8. 本書の編集・執筆は、岡崎の協力を得て昌子がこれをおこなった。

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 地理的歴史的環境	3
III 遺構と遺物の概要	6
IV 自然科学的調査	35
1. 下黒田遺跡の毛髪鑑定	35
島根県警察本部科学捜査研究所 中村 博 明	
2. 大庭下黒田遺跡の地形・地質と考古学的二・三の知見	42
島根大学教育学部 三 浦 清	
V 小 結	54
1. 出土遺物の検討	54
2. 遺構の検討	55

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である 斗 拱、すなわち 檼 と 簷 の組み合わせによって全体で軒を支える 腕 木の役をなす 根 物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していこうというものです。



文化財愛護
シンボルマーク



I. 調査に至る経緯

松江市建設部建築課では昭和61年度と62年度の2か年にわたり、松江市大庭町の「市営大庭第1住宅建替工事」を実施することになり、松江市教育委員会社会教育課に事前調査の依頼があった。

この工事区域内には周知の遺跡はなかったものの、東側に隣接する地域には「黒田館跡」(松江市教育委員会が昭和58年度に調査)⁽¹⁾が、また北側約100 mには、国の史跡である「出



第1図 下黒田遺跡位置図

雲岡山代郷正倉跡」(昭和55年12月5日付指定)⁽²⁾が存在することや、この周辺地域が緩やかな低台地上であることから本区域一帯にも、正倉跡・官衙跡・集落跡などの遺跡のある可能性が高いと思われた。よって、松江市教育委員会社会教育課が事前に試掘調査を実施し、遺構の有無とその範囲の確認を行い、遺構が確認できれば本調査を実施し、その性格・価値を判断することになった。

この5,100㎡の工事区域内には、多量の黒褐色土が堆積していると予想され、この黒褐色土は58年度の黒田館跡の調査結果より、遺構・遺物を含まない土層であることが確認されているので、遺構面と思われる地山面の土20cm程までは重機による鋤取り工事を全面的に実施することになった。しかしながら、工事区域の東側に向けて旧地形が低くなっていく傾向がみられることから、鋤取り土量の算定のための地山面までの深さと、遺構・遺物の有無の確認のため、4月23日、24日の2日間、一辺1mの試掘溝を17ヶ所、任意に設定し、調査を行った(第2図)。

この結果、地山面までの深さは、工事区域の西側では20～50cmであったが、東側では120～150cmで、全体的にかなりの起伏があることが分った。また、柱穴跡と思われる落ち込みが9ヶ所、溝跡と思われる落ち込みが2ヶ所、須恵器・土師器の甕片が2ヶ所から検出され、ほぼ全面的に調査する必要が生じた。

よって、5月16日より5月31日までの11日間を費やして鋤取り工事を実施し、その後10m×10mの調査区を工事区域全体に設定し、幅4mのトレンチを東西方向に3本、南北方向に3本設定し、遺構を検出すれば順次調査区を拡張していくという調査方法で開始した。

発掘調査は、5月21日より10月9日までの間、計78日間を費やして実施し、調査開始11日目で早くも試掘調査時に確認した溝状遺構がかなりの規模で存在することが分った。

なお、溝状遺構のSD01、02、04は一部のみ掘り、また掘立柱建物跡のSB01、02、04、05の各柱穴は、二～四分分割して掘り、共に完掘はしなかった。

II. 地理的歴史的環境

下黒田遺跡は、松江市大庭町下黒田に所在し、国道342号線と県道八重垣神社・竹矢線の交差点（通称大庭十字路口）から南東へ約100mの地点にあり、東西200～500m、南北1kmにわたる標高20～30mの通称団原丘陵のなだらかな低台地上に立地している。この丘陵の西側には幅200m程の南北に細長い谷が神魂神社のあたりから北に延びて、北側の馬橋川が形成した狭い谷につながっている。また、東・南側には、意宇川が形成した東西3km、南北0.8～1.3kmの広がりを持つ扇状地が開けている（第1図）。

このような地理的環境を持つ本遺跡周辺は、意宇平野を中心として、縄文時代から人々が生活を営んできたところである。

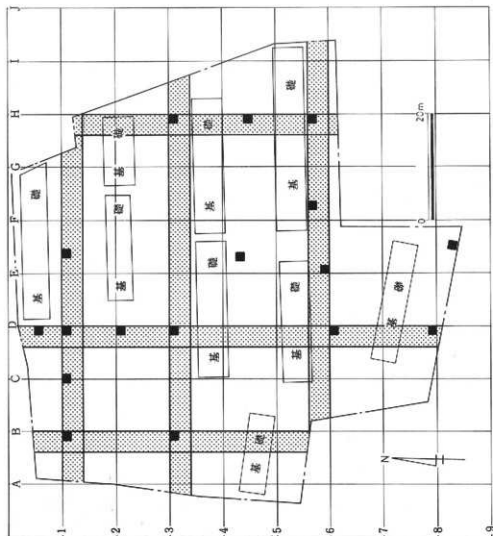
まず、周辺に分布する遺跡から概観してみよう（第3図）。

縄文時代の遺跡には、前期の連続爪型文土器を出土した「竹矢小学校校庭遺跡」⁽³⁾、条痕文土器を出土した「法華寺前遺跡」⁽⁴⁾、中期の「波子式」土器を出土した「的場遺跡」⁽⁵⁾、後期の磨削縄文土器を出土した「才塚遺跡」⁽⁶⁾などが、意宇平野の北側周縁に沿って点在している。しかし、本遺跡周辺には、この時代の遺跡はまだ確認されていない。

弥生時代に入ると、前期の甕形・壺形土器を出土した「布田遺跡」⁽⁷⁾など多数の遺跡が意宇平野の北側に限らず中央部や南側でも確認されており、生活範囲が拡大したことを窺わせる。布田遺跡の出土土器から分るように、九州などの他地方とさほど時間を隔てない時期に本遺跡周辺地域にも農耕文化が伝播し、意宇平野で水稻農耕が行われたと思われる。また、平浜八幡宮蔵の細形銅剣⁽⁸⁾が示すように、船載銅剣を保有する有力な首長のいた集落があったと思われる。そして、後期の住居跡が出土した「黒田畦遺跡」⁽⁹⁾、弥生式土器を出土した「山代遺跡」⁽¹⁰⁾、「小無田遺跡」⁽¹¹⁾などのように団原丘陵で遺跡が確認され出すのもこの時代である。

古墳時代になると、中期の「石屋古墳」⁽¹²⁾、「井ノ奥4号墳」⁽¹³⁾などの大形古墳、後期の「岡田山1号墳」⁽¹⁴⁾、「岩屋後古墳」⁽¹⁵⁾のように主体部に梯穴式石室や石棺式石室をもつ古墳、「狐谷横穴群」⁽¹⁶⁾、「安部谷横穴群」⁽¹⁷⁾のような大横穴群などの墳墓が築造されるようになる。団原丘陵一帯では、古墳時代後期から奈良・平安時代の須恵器・土師器片が散布しており、古代集落があった可能性が高いと思われる。

奈良時代、平安時代の遺跡は、「出雲国府跡」⁽¹⁸⁾、「出雲国山代郡正倉跡（以下「正倉跡」とする）」のような官衙跡や「出雲国分寺跡」⁽¹⁹⁾、「出雲国分尼寺跡」⁽²⁰⁾、「四王寺跡」⁽²¹⁾などの寺院跡がある。その他、「出雲国風土記」をみると、《意宇六社》—神魂神社・真名

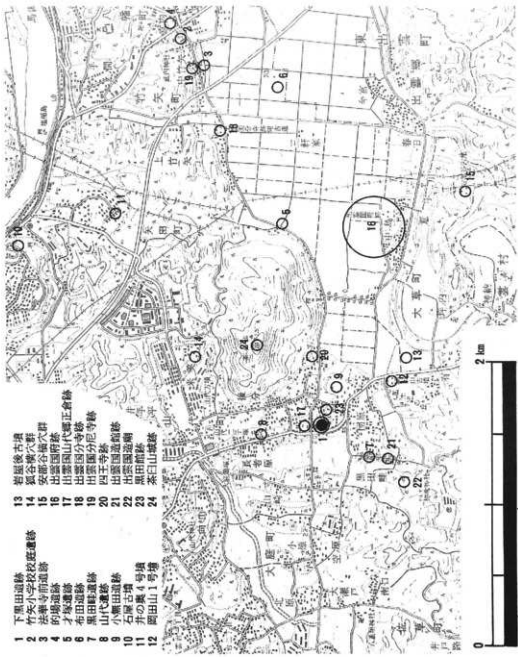


第2図 調査区、トレンチ、試掘調査区(トレンチ)——■、試掘調査区(■)

井神社・八重垣神社・六所神社・熊野大社・掛屋神社—と呼ばれる古式ゆかしい神社もある。この《意字六社》の頂点に立つのが杵築大社であり、その祭祀を司るのが出雲国造家であった。この出雲国造家が居住した館と思われる「出雲国造館」²²もあった。

このように、この地域が奈良・平安時代には出雲国の政治・文化の中心地であったと言える。

鎌倉・室町時代は、出雲国造家という出雲国内最大の豪族と共に、源氏・佐々木氏・山名氏・京極氏・尼子氏という武士たちが闊歩した時代であった。彼らに関連する遺跡・遺構は、まず正林寺の裏山に出雲国造家の菩提寺とされる「出雲国造廟」²³がある。また「黒田館跡」²⁶が本遺跡の隣接地にあり、現在もその土塁の一部が認められる。さらに「黒田館



第3図 周辺的主要遺跡分布図

跡」とほぼ同じ時期とされる「茶臼山城跡」²⁵がある。

以上、本丘陵を中心とする周辺地域の地理的歴史的環境を述べた。前述したように本遺跡と隣接し関連が深いのは、「正倉跡」と「黒田館跡」である。本遺跡とこれらの関連を述べる前に調査の概要を述べることにする。

Ⅲ. 遺構と遺物の概要

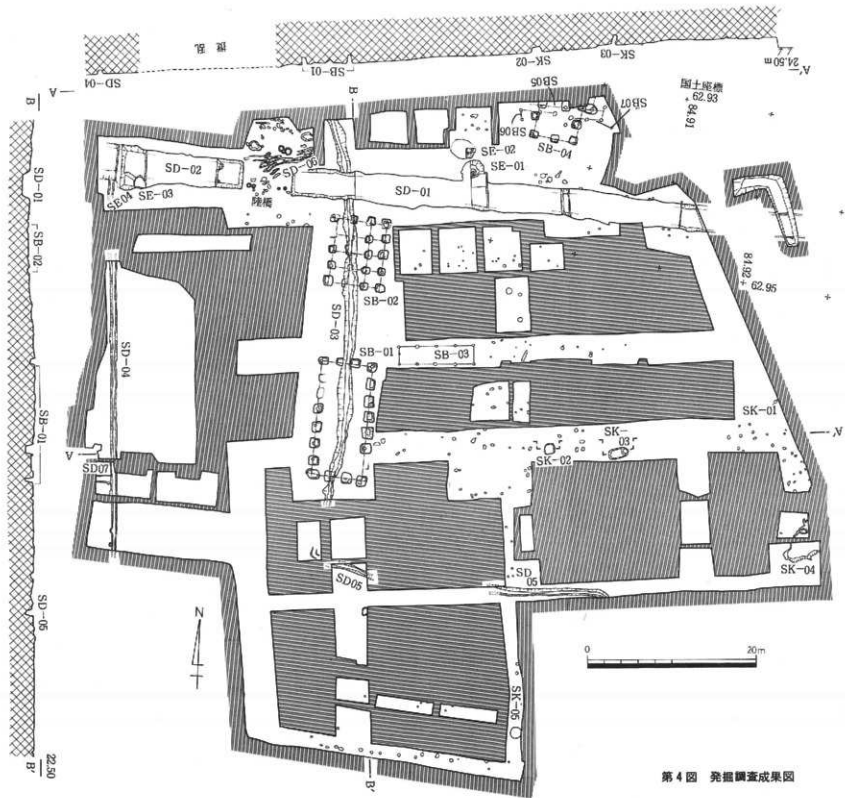
調査の結果、本遺跡で検出された遺構は、掘立柱建物跡が7棟、溝状遺構が7条、土壌が5基、井戸状遺構が4基であった。以下、これらの概略と出土遺物について述べる（第4図）。

① SB01（第5・6図）

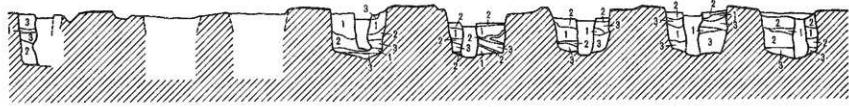
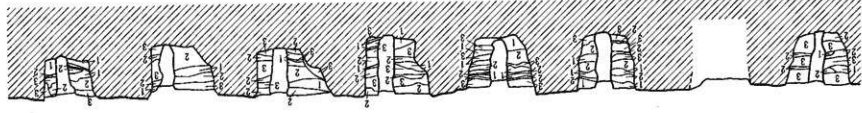
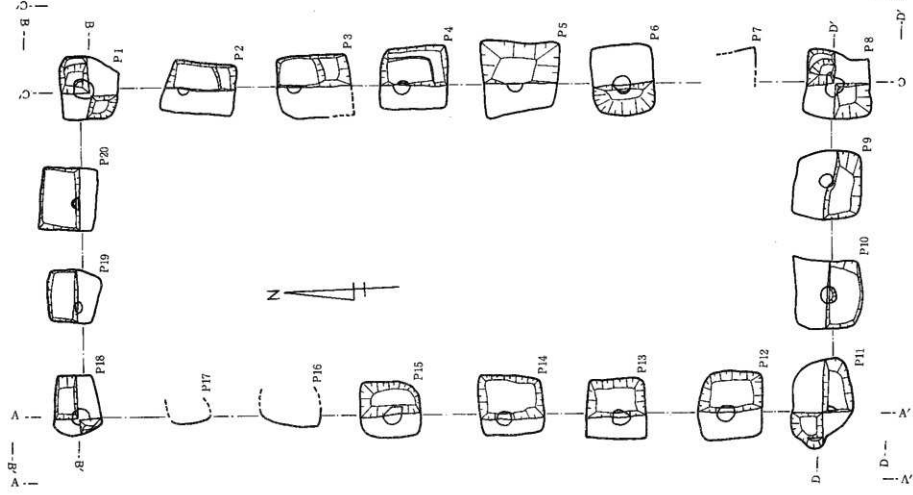
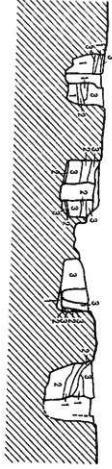
調査区中央に位置する南北棟桁行7間（13.54 m）、梁行3間（5.88 m）、79.62 m²の床面積をもつ掘立柱建物で、棟方向は真北に対しN-3°-Eである。柱間寸法は桁行で1.92、2.00、2.10 mを、梁行で2.08 mを計る。各柱穴の上部は、市営住宅などによるかなりの削平、攪乱を受けており、P7、P16、P17は全様を知ることはできなかったし、P11、P20の上部には攪乱土が認められた。しかし他の柱穴の下部は保存状態がよく、ほぼ全様を知り得た。掘り方は、P11が略円形を呈する以外は、方形、隅丸方形、略方形のプランを呈していた。その大きさは、0.96×0.94 mから1.44×1.4 mを計り、現存の深さは0.70～1.08 mを計る。このうち、P1、P2、P3、P4、P8は中程の深さにテラスをつくり、2段掘りの状態をなしていた。また、P1、P4、P6、P8、P10、P12、P13、P14、P18、P20の底面には、柱根を固定するためと思われる径24～30 cm、深さ1～10 cmの凹みを穿っている。裏込め土は、黄色土、黒色土、黄褐色土が互層状に詰められていた。そして径25～38 cmの柱の痕跡と思われる柱状の褐色土が認められた。また、裏込め土の堆積状況よりP19は柱を抜き取った後再使用したことが分かる。遺物は柱穴の裏込め土中より須恵器片が2片出土し、そのうち第6図(1)はP12の中程の深さの裏込め土中から出土した蓋環片と思われる。

② SB02（第6・7図）

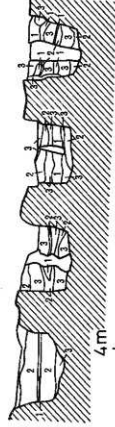
SB01の北側、約8.5 m離れて位置する南北棟桁行4間（7.44 m）、梁行3間（6.08 m）、45.24 m²の床面積をもつ総柱造りの掘立柱建物で、棟方向は真北に対しN-4°-Eであり、東西両側の桁行面をSB01とはぼ合わせている。柱間寸法は、桁行で北から1.9～1.92、1.9～1.92、1.7、1.9～1.92 mを計り、3間目が他よりやや狭くなっている。梁行では西より2.1～2.12、2.06、1.88～1.92 mを計り、やはり3間目がやや狭くなっている。各柱穴は、後に述べるSD03及び市営住宅によりかなりの削平や攪乱を受けており、柱穴の深さが0.16～0.52 mしか残っていなかったし、P12、P13、P14、P15、P19は完全に破壊され、痕跡しか留めなかったし、P1、P10、P11も半分程しか残っていなかった。柱穴の掘り方は、P20が略円形を呈する以外は、方・略方形のプランを呈し、



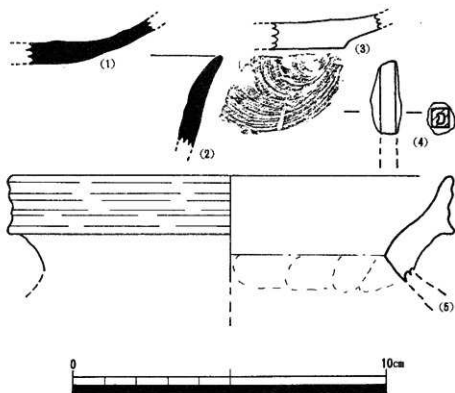
第4図 発掘調査成果図



- 1 褐色土
 - 2 灰色土
 - 3 黄褐色土
- L=22.00 m



第5圖 SB01測量圖

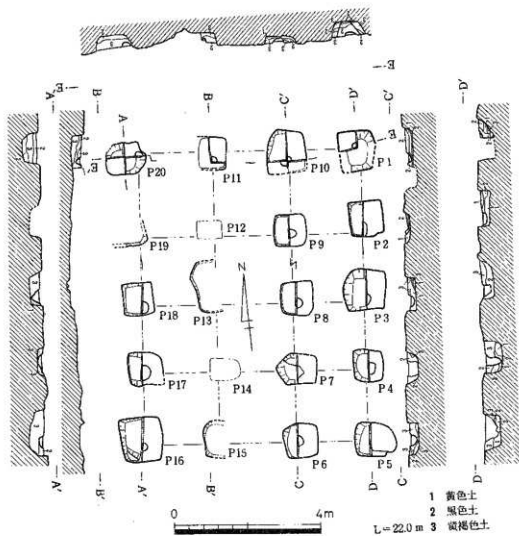


第6図 礎物跡出土遺物実測図

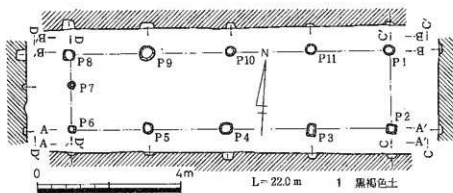
0.87×0.81～1.2×1.12mの規模を持っている。P5, P7には抜き取り痕が認められ掘り方のプランが変形している。裏込め土は、黄色土、黒色土、黄褐色土を互層状に詰めているが、SB01よりも不明瞭である。柱の痕跡と思われる径24～40cmの褐色土が柱状に認められたが、殆んどが掘り方の床面まで達してはいなかった。また、P1はSB01のP19と同様に、再使用したものであろう。遺物は須恵器が2片と鉄滓が出土した。第6図②は、P10の最下層の裏込め土から出土した環の口縁部片である。

③ SB03 (第6・8図)

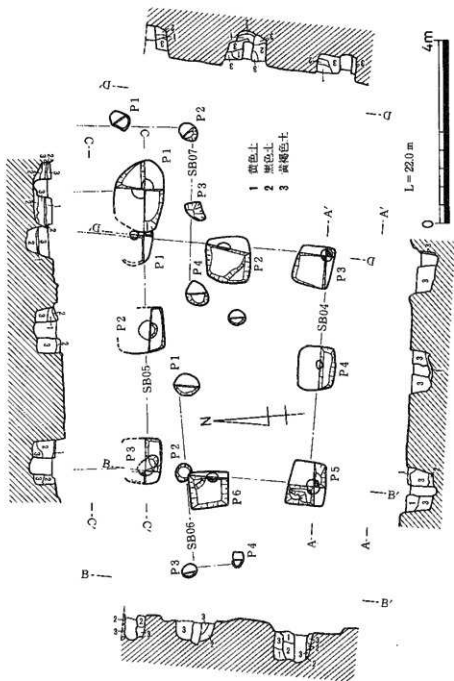
SB01の東側約2.5m離れて位置する東西棟桁行4間(8.72m)、乗行1間(2.1m)、床面積18.31㎡の掘立柱建物であるが、西側乗行は2間となっている。棟方向は真北に対してN-86°-Eである。柱穴は殆んどが略円形のプランで、径19～42cmの大きさと8～29cmの深さを持つものである。柱間寸法は桁行が西より2.07, 2.27, 2.22, 2.16mを西側乗行が北より0.86, 1.24mを計る。遺物は、P9の底部より底部回転糸切りの土師質土器が1片出土した(第6図③)。



第7图 SB02实测图



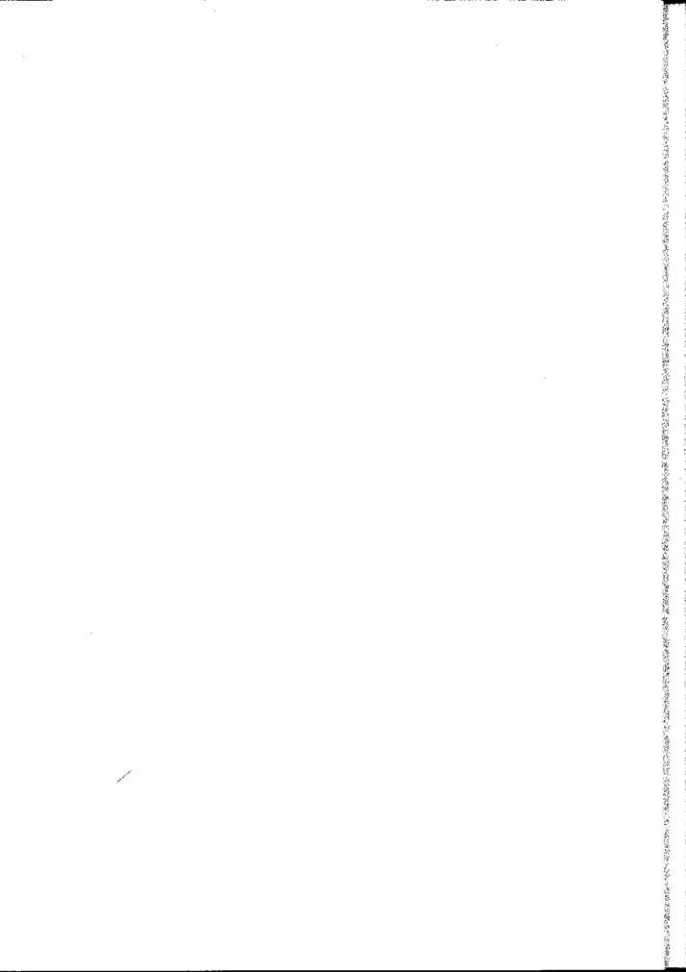
第8图 SB03实测图



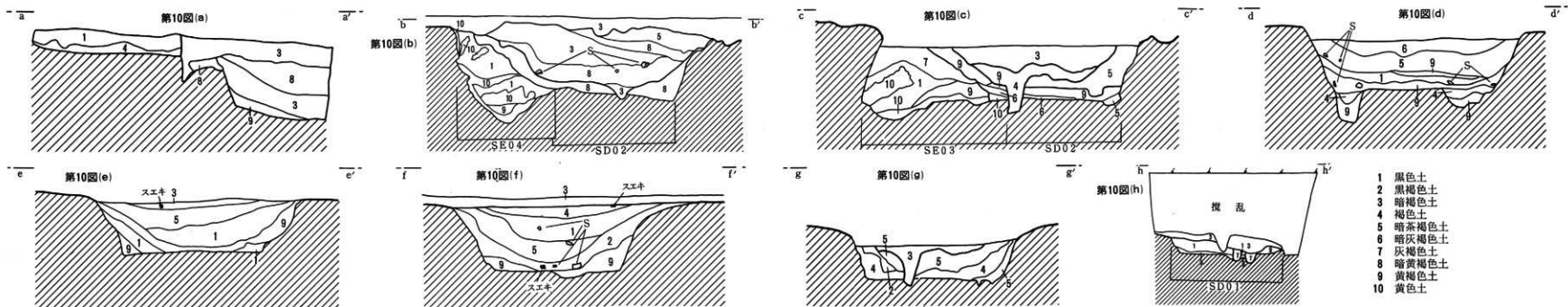
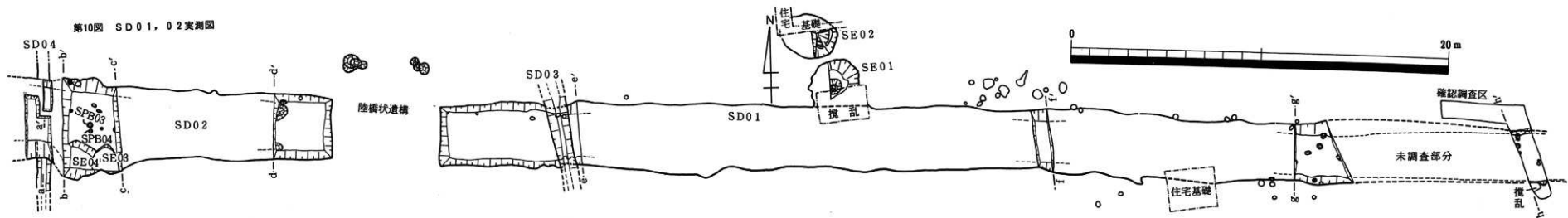
第9図 SB04, 05, 06, 07実測図

④ SB04 (第6・9図)

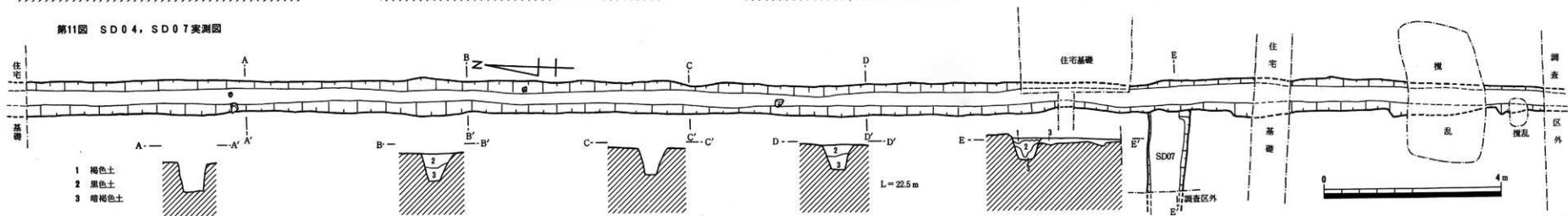
調査区北東隅に位置する東西2間(5.08m)、南北2間(4.3m)の掘立柱建物であるが、北側の調査区外へさらに続くと思われる、南北棟となる可能性が高い。その棟方向は、 $N-9^{\circ}-E$ である。柱間寸法は、桁行で北より2.06, 2.24m、梁行で西より2.69, 2.39m



第10图 SD01, 02 实测图



第11图 SD04, SD07 实测图



- 1 褐色土
- 2 黒色土
- 3 暗褐色土

を計る。柱穴の上部は、市営住宅による削平を受けており、深さが0.48~0.77 mしかなく、またP1は半分しか残っていなかった。ほかの柱穴は、0.94×0.8~1.0×0.98 mの隅丸方形を呈する掘り方を持つ。P2, P5, P6は、中程の深さにテラスをつくり2段掘りの状態をなしていた。P1, P3, P5, P6の底面には、柱根を固定するためと思われる径20~28cm、深さ4~5cmの凹みを穿っている。裏込め土は、黄色土、黒色土、黄褐色土を互層状に詰めているが、SB01と比べると不明瞭である。柱の痕跡と思われる径20~28cmの褐色土が柱状に認められるが、P2, P4は底面まで達してはいなかった。遺物はP2の検出面より土器片が1片(第6図(5))、角釘が1(第6図(4))、土師器細片が3片出土した。第6図(5)は弥生後期の甕口縁部片と思われる。

⑤ SB05 (第9図)

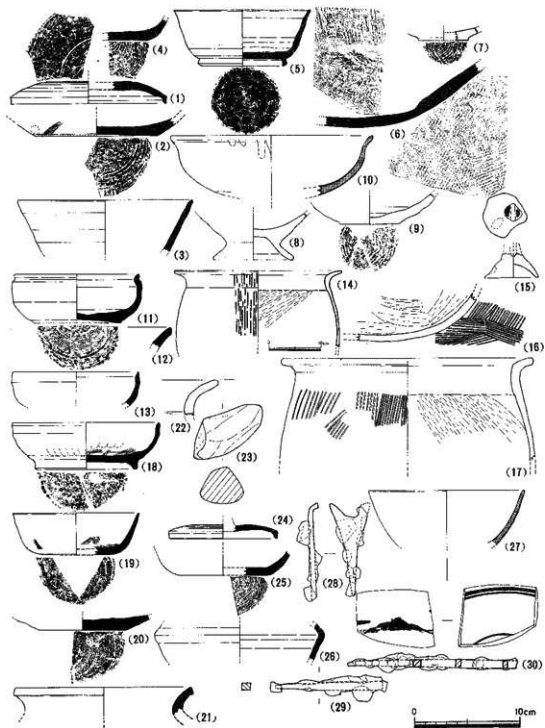
この遺物は、柱穴を3穴(5.92 m)しか検出できなかったので規模などは不明であるが、SB01, 02, 04からすると北側調査区外に続くものと思われる。この3穴の柱間寸法は2.96m等間を計り、この方向は真北に対してN-86°10'-Wの角度をもつ。SB05がSB01, 02と同じく南北棟とすれば、棟方向の角度はN-3°40'-Eとなる。この3穴とも半分程は市営住宅によって検出できず、それらの全様は分らないが、P1は楕円形、P2, P3は隅丸方形と思われる。一辺1.0~1.1 m、深さ0.44~0.78 mの規模を持つ。裏込め土は黄色土、黒色土、黄褐色土を互層状に詰めているが、SB01と比べるとやや不明瞭である。P2, P3は底面に柱根を固定するためと思われる径33~38cm、深さ5~10cmの凹みを穿っている。柱の痕跡と思われる35~38cmの柱状の褐色土が認められた。さてP1は、SB04のP1を切っていることより、SB05がSB04よりも時期的に新しいと言える。SB05に関係する遺物はなかった。

⑥ SB06・SB07 (第9図)

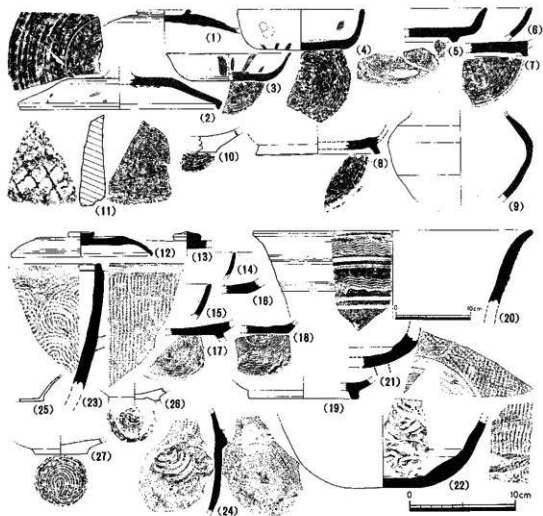
SB04, 05に重複するように検出した掘立柱建物群であるが、SB06, 07ともに柱穴が各々4穴ずつしか検出できなかったため、それらの全様を知ることはできなかった。柱穴は、径32~48cm、深さ10~20cmの円形・略円形プランを呈し、その柱間寸法はSB06の東西方向が2m等間、南北方向が0.9mを、SB07の東西方向が1.8m等間、南北方向が1.6mを計る。東西方向の角度はSB06でN-90°-W、SB07でN-83°-Wを計る。この2棟から遺物は全く出土しなかった。

⑦ SD01・SD02 (第10・12・13・14図)

SB02とSB04の間に位置する東西大溝で、調査区西寄りに陸橋状遺構を設け、ここで大溝は東側(SD01)と西側(SD02)に分かれている。この大溝は共に上端幅



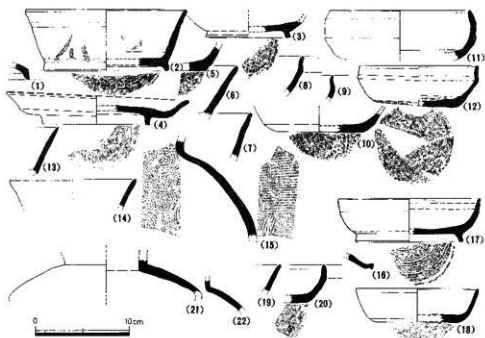
第12圖 SD01出土遺物実測図



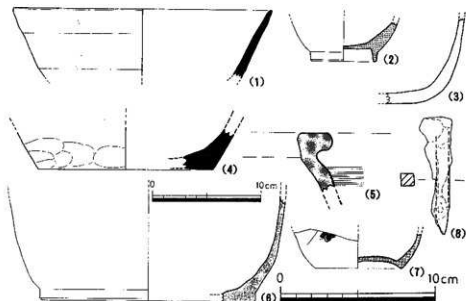
第13図 SD 0 2 (上・中層) 出土遺物実測図

3.0~3.6 m, 下端幅 2.0~2.3 m, 深さ 0.8~1.3 m を計り, 断面の形を呈し, SD 0 1 の長さは 60.3 m, SD 0 2 のそれは 15.9 m を確認したが, さらに東西に各々続き, その全様を窺うことはできなかった。この主軸は真北に対して $N-88^{\circ}-W$ で, SB 0 1・0 2 の棟方向とはほぼ直角をなす。また, SD 0 1・0 2 の北側上端付近や底面には径 20~70 cm の柱穴が不等間隔に認められるが, このうちの数穴は大溝の堆積土層の上・中層から掘り込まれており, その下部より土師質土器が出土した (第26図(8)(9)(10))。

さて, 調査区西端では SD 0 2 と SD 0 4 が交差しているが, SD 0 2 が SD 0 4 より新しいことが (第10図(a)), またこの東隣りでは SD 0 2 が SE 0 3・0 4 を切っていることが (第10図(b)・(c)), SD 0 2 の堆積土層より分かっている。



第14図 SD 0 2 (下層・その他) 出土遺物実測図



第15図 SD 0 3 出土遺物実測図

SD01・02からは、土師器の坏・壺甕類・甔の把手・手捏ね、須恵器の坏蓋・高台坏・壺甕類・提瓶・横瓶・鍋、土師質土器、陶磁器、瓦、鉄器、石器類などの多種多様の遺物が至る所から出土した。これらの破片数をみると、SD01からは508破片、SD02からは667破片出土したが、図面に掲げることができたのは、SD01が32、SD02が50個体であった。この中で須恵器はSD01・02ともに上・中・下層まんべんなく出土したが、土師器はSD01の中・下層から、土師質土器はSD01・02の上・中層から、磁器や瓦は上層から各々出土していることが分る。特異な器種としては、SD01の中層から手捏ね土器が、下層から甔の把手が、またSD02の中層から須恵器の鍋形土器と思われる破片と提瓶が、下層から横瓶が各々出土している。

さて、これらのうち最下層から出土した土器は、SD01では第12図(13)~(14)、SD02では第14図(1)(2)であった。このうち第12図(13)~(14)、第14図(1)(2)は、これらの形態的・技法的特徴より8世紀後半代と言えよう。

⑥ SD03・SD05 (第4・15図)

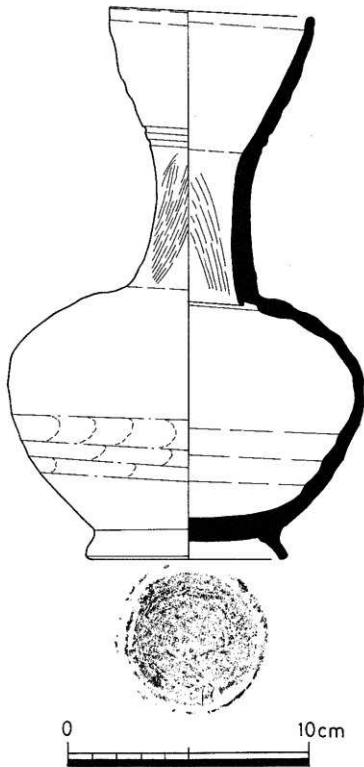
SD03は、調査区中央を南から北に蛇行気味に走り、SB01、SB02、SD01を切っているが、さらに北側調査区外へと続く。つまり、長さ51m以上、上端幅1.7m、下端幅0.6m、深さ30cmの断面U字形を呈する溝状遺構である。遺物は、須恵器の壺片1、土師質土器片9、陶器片2、角釘1などが出土しているが、溝上部より底部をへら割りした須恵器壺片(第15図(4))、陶器片2(第15図(5)(6))、角釘(第15図(8))が、また、溝底部より布志名焼の小形碗(第15図(2))が出土した。

SD05は、調査区南側を東西に走り、さらに東側調査区外へと続く、長さ33m以上、上端幅80cm、下端幅35cm、深さ15cmの断面U字形を呈する溝状遺構である。遺物は何もなかった。

さて、SD05は西側検出箇所付近でさらに北側に曲がることを確認した。よって、前述のSD03とSD05は同一の溝状遺構である可能性が非常に高く、そうするとこの総延長は87m以上になると思われる。

⑦ SD04・SD07 (第11・16図)

SD04は、調査区西端を南北に走るが、さらに南北の調査区外へと続く小溝で、長さ50m以上、上端幅75cm、下端幅30cm、深さ60cmの断面U形を呈し、主軸は真北に対しN-17°-Wを計る。そして北端でSD02によって切られているし、南側ではSD07を切っている。SD04の検出面より須恵器の高台付長頸壺1個体(第16図)が横位でつぶれた状態で出土したが、その他は細片が数片出土したにすぎない。この長頸壺は形態的特徴な



第16図 SD04出土須恵器実測図

どから8世紀後半頃と思われる。

SD07は、前述のようにSD04に切られた東西溝であるが、さらに西側調査区外へ続くため、この全様は不明である。長さ1.9m以上、上端幅約1m、下端幅約70cm、深さ10cm程度の浅い溝である。主軸方向は真北に対して $N-89^{\circ}-W$ である。遺物は全くなかった。

㊦ 陸橋状遺構とSD06(第4・17・18図)

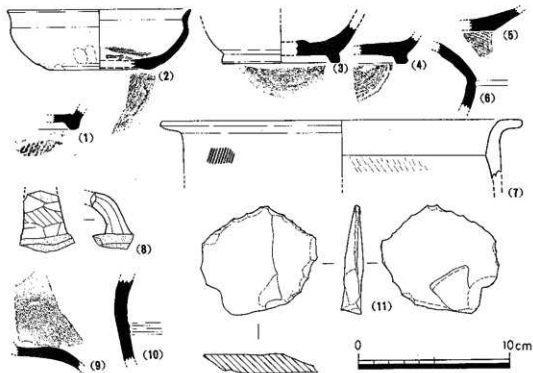
SD01とSD02に付属し、多数の不定形の柱穴や小溝(SD06)を伴う遺構で、東西幅5.8m、南北奥行3mを計る。これらの柱穴の中でも北側東西端にある2穴は、径0.6~1m、深さ10~40cmの楕円形の掘り方に径30cmの円形の柱痕をもつしっかりしたつくりで、各々3回程の礎で替えをしたことを示している。また、S

D06は主軸を真北に対しN-59°50'-Eとした長さ5.6m以上、上端幅40cm、深さ8cmの断面U字形を呈する不整形で陀行気味に走る溝状遺構である。そして、この底は須恵器片や石を敷きつめた状態であった(第17図)。

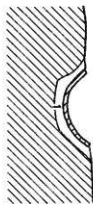
遺物は、陸橋状遺構の北側半分から細片状態で土師器の壺甕類、須恵器の坏蓋・高台坏・無高台坏・壺甕類・高坏・把手、土師質土器、陶器、鉄器、石器などが151破片も集中して出土したが、図面に掲げることができたのは、陸橋状遺構出土の土師器の壺甕類、須恵器の無高台坏・高台坏・壺甕類とSD06から出土した須恵器の坏蓋・高坏・把手、石器のみであった。このうち、第18図(2)(4)は、その形態的特徴などから8世紀後半頃と思われる。

⑪ SK01 (第19・20・21図)

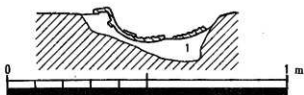
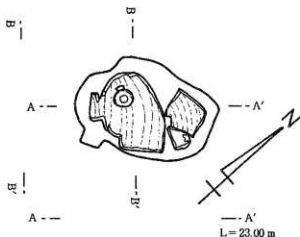
調査区東端に位置する褐色土中より掘り込まれた土壇である。33.8×43.7cm、深さ17cmの略長円形の掘り方に備前焼の壺を横位に置き、その中に土師質土器16個体以上、和鏡1面、銭貨29枚、モミガラ多量、人毛若干を埋納していた。モミガラを入れた土師質土器を数枚重ねて一番上の土師質土器の中には、さらに銭貨多数を入れ、そこに和鏡を立てかけ壺の底部片で上から蓋をするものであったが、その壺の破片を接合しても完形にはなら



第18図 陸橋状遺構・SD06出土遺物実測図



1 暗茶褐色土



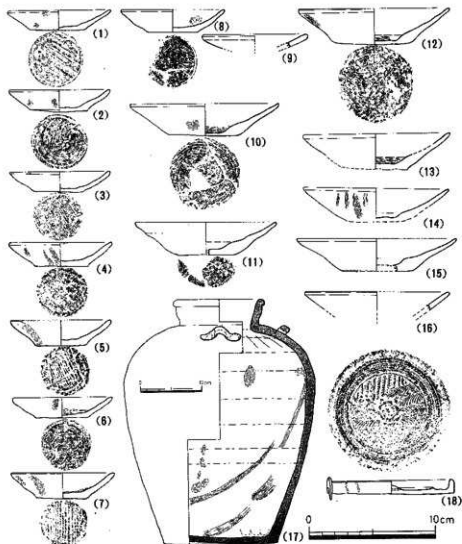
第19図 SK01実測図

ず、横位での上半分が欠損していることなどから、壺の半分を打ち欠き、そこから壺内にこれらの遺物を埋納したと考えられる。

この壺(第20図08)は、その形態的特徴などから、15世紀後半の備前焼の双耳壺か四耳壺で、和鐘は柴垣柳樹双雀鏡(第20図08)である。錢貨(第21図)は29枚のうち8枚が不明であったが、残りは水楽通宝が8枚、元載通宝が3枚、聖宋元宝・政和通宝が2枚、景徳元宝・祥符元宝・天聖元宝・皇宋通宝・元祐通宝・宣徳通宝が各々1枚であった。土師質土器には、大形になるものが6個体と小形になるものが9個体あるが、小形品の底部には、回転糸切り後のスノコ状痕と呼ばれる板状圧痕が認められる。また、小形のうち、第20図(1)~(4)(6)(7)は完形で出土したし、第20図(1)~(8)の口唇部には油煙が付着していた。人毛については、詳しくは第IV章を参照されたいが、血液がA型の人間の頭髮であることが、分析結果より分っている。

② SK02 (第22・26図)

調査区中央よりやや南側に位置する1.2×1.1m、深さ63cmの隅丸方形の土墳墓である。検出面より45cmの深さまでの土壌内から多量の転石、土師器片1、須恵器の壺片1、土師質土器片2(第26図(2))、美濃焼灰軸小皿片3(第26図(1))が出土した。この美濃焼灰軸



第20図 SK 01 出土遺物実測図

小皿片は、いずれも同一個体で、その形態的特徴から16世紀頃のものと思われる。

⑬ SK 03 (第23図)

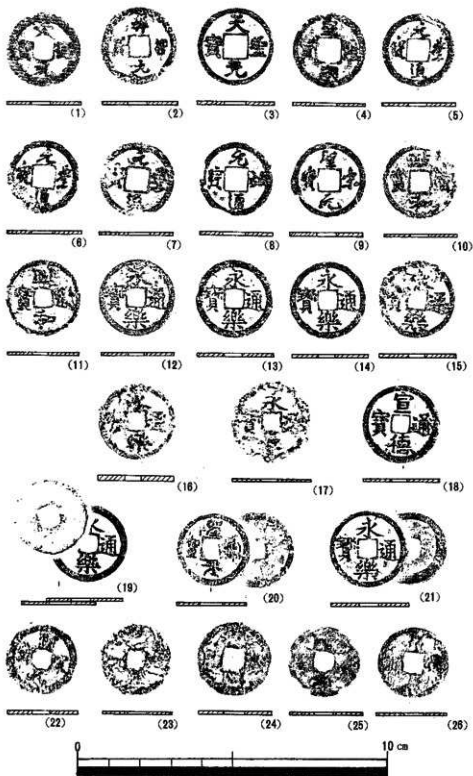
SK 02の東側に位置する2.2×1.2 m、深さ20cmの隅丸長方形の土壌である。さらにこの土壌内の東側に75×85 cm、深さ1mの袋形状の円形土壌が斜めに穿たれている。遺物は何もなかった。

⑭ SK 04 (第24・26図)

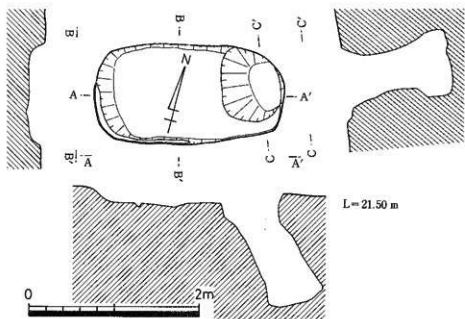
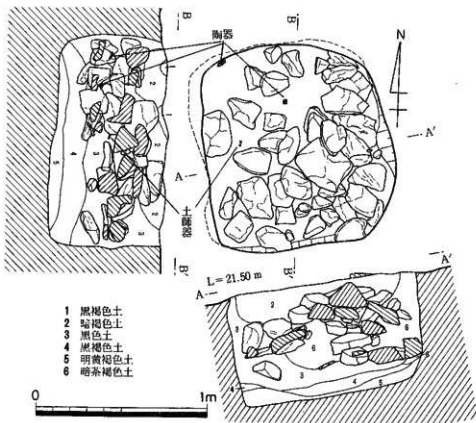
調査区の東南端に位置する深さ50cm程の不整形

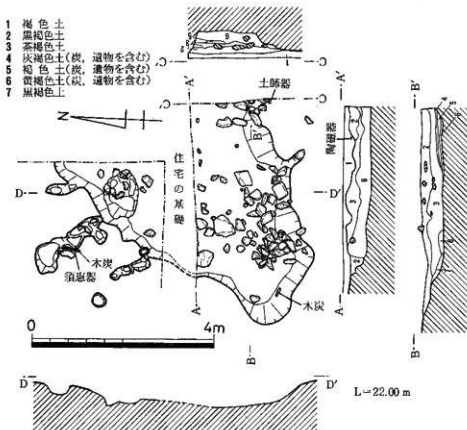
第1表 SK 01 出土銭貨年表

中国銭貨	初鑄年	時 代	
		中国	日本
景徳元宝	1004	北宋	平安
祥符元宝	1008	"	"
天聖元宝	1023	"	"
皇宋通宝	1039	"	"
元豊通宝	1078	"	"
元祐通宝	1088	"	"
聖宋元宝	1101	"	"
政和通宝	1111	"	"
永楽通宝	1408	明	室町
宣徳通宝	1433	"	"



第21圖 SK 0 1 出土錢貨實測圖





第24図 SK 04 実測図

の土壌であるが、さらに西側調査区外へ続いておりこの全様を窺うことはできなかった。この土壌の上層からは大量の転石が出土し、その中には五輪塔の地輪のように加工したものが1個認められた。その下の灰褐色土・褐色土・黄褐色土から大量の木炭、須恵器の破片1、土師質土器片1(第26図③)が出土した。

⑮ SK 05 (第4・26図)

調査区の南側に位置する黒色土中より掘り込まれた径1.3m、深さ50cm程の円形土壌である。底面より10cm上のところから土師質土器1個体(第26図④)が出土した。

⑯ SE 01 (第25・26図)

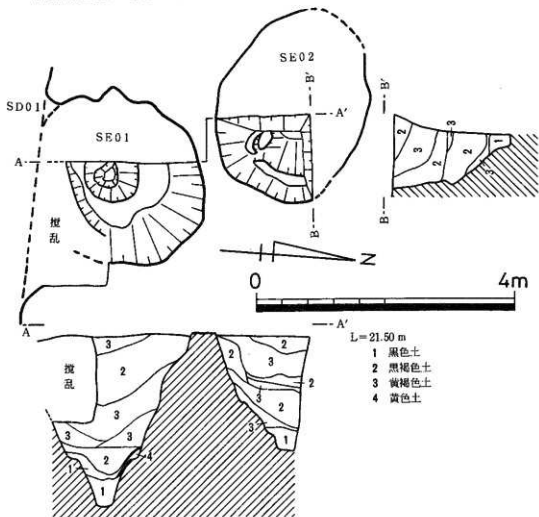
SD 01の北側に隣接する径2.8m、深さ2.7mの途中で段をなす円錐形を呈する井戸状遺構である。南半分が、後世の攪乱を受けており、SD 01との切り合い関係は確認できなかった。遺物は、須恵器の壺片1、土師器片1が覆土中から、備前焼燐鉢片1(第26図⑤)が上端より1.5m下の覆土中から各々出土した。

㉑ SE02 (第25・26図)

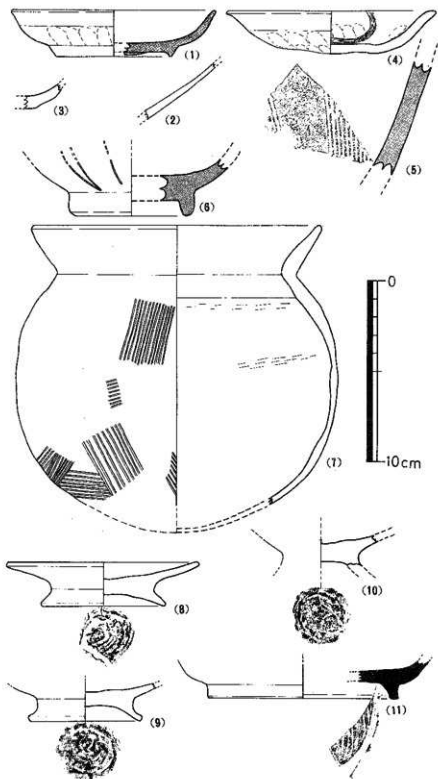
SE01の北側に位置する2.4×3.0m、深さ1.8mの楕円形の井戸状遺構である。4/5程しか調査しなかったが、これもSE01と同様に中程で段をなす円錐形を呈していた。遺物は、土師器か土師質土器と思われる細片5、中国産青磁の碗片1(第26図(6))が出土した。碗は外底部に述弁文、内底部に見込みの圈線が認められ、15世紀のものと思われる。

㉒ SE03・SE04 (第4・26図)

SD02とSD04が交差したところの東隣りに位置する井戸状遺構である。SD02によって大半が切られているためにその形状・規模は不明であるが、概ね深さ2m程の円錐形を呈すると思われる。遺物は、SE04の中層より土師器の甕(第26図(7))が横位で半個体出土したにすぎない。



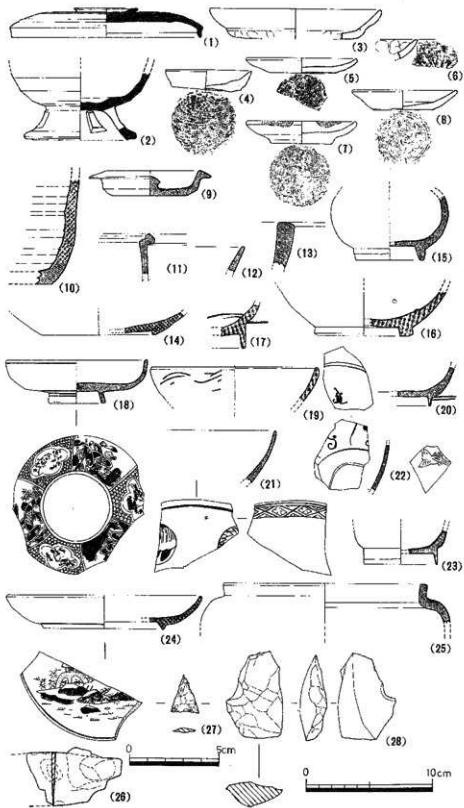
第25図 SE01, 02実測図



第26图 SK 02, 04, 05, SE 01, 02, 04, SPB 03, 04出土遺物実測図

この他に、径20~40cm、深さ10~30cmの円形ピットが多数確認されたが、それらは建物にならなかったし、遺物も伴出しなかった。よってこれらの時期については言及できかねる。しかし、前述したようにSPB03・04はSD01・02がある程度埋まった時に、褐色土系の面から掘り込まれていた。SD01・02以外のところでもこのような例が1, 2ヶ所認められた。とすると、調査の初期に重機掘削した黒褐色土の面から掘り込まれていた可能性も考えられ、これらのピットは中近世頃のものと思われよう。

さて、遺構に伴わない遺物については、第27図を、また、本遺跡出土の全遺物の詳細については、出土遺物観察表を参照して頂きたい。



第27図 遺構に伴わない遺物実測図

IV. 自然科学的調査

1. 下黒田遺跡の毛髪鑑定

島根県警察本部科学捜査研究所 中村博明

1) はじめに

松江市大庭町の下黒田遺跡において、松江市教育委員会が発掘調査した際、和鏡、かわらけ、初穀、古銭等と共に、室町時代のものと思われる毛髪様のものが発見された。この毛髪様のものについて、同委員会より鑑定を依頼されたのでその検査成績を報告する。

2) 毛髪の外観

資料毛髪は長さが2～3cm程度の黒色を呈する毛の束であり、黒褐色の土砂が付着していた(写真1)。

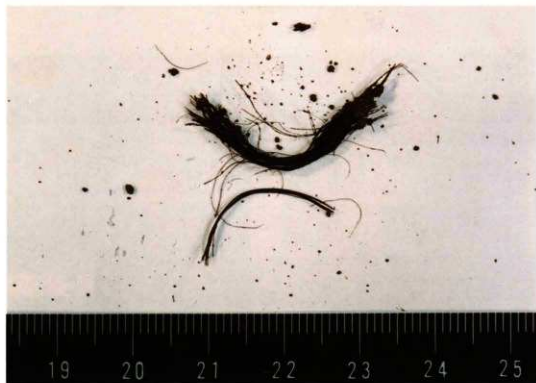


写真1 毛髪の外観

3) 形態学的検査

資料毛髪(任意の10本)の肉眼及び光学顕微鏡による形態学的検査の結果を表1に示す。資料毛髪の長さはいずれも2cm程度で、形状は弧状である。色調は茶褐色系(写真2～6)で、その太さは60 μ m～100 μ mである。また髄質の出現形態は点断続状(写真2～4)

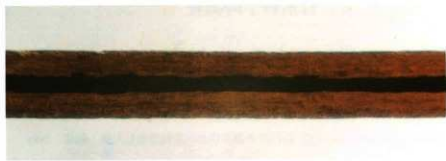


写真 6



写真 5



写真 4

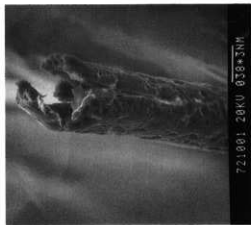


写真 3



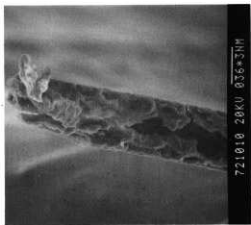
写真 2

毛髪の顕微鏡写真



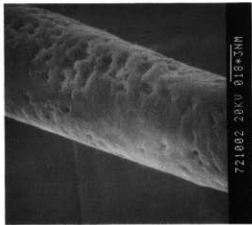
721801.20KU.038*3NM

写真7 毛側端部



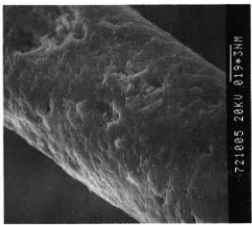
721810.20KU.036*3NM

写真8 毛側端部



721802.20KU.018*3NM

写真9 毛幹部



721805.20KU.019*3NM

写真10 毛幹部

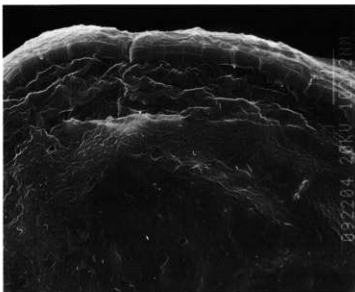


写真11 横断面

毛髪のエレクトロニクテック写真

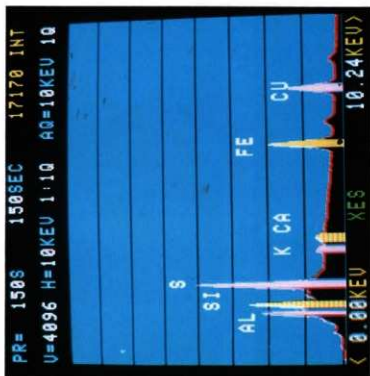


写真12 毛髪のX線スペクトル写真

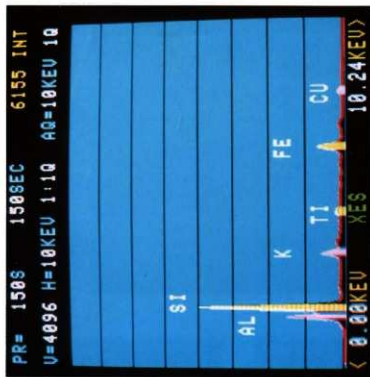


写真13 土砂のX線スペクトル写真

から連続状(写真5, 6)であり, 無髄のものは認められない(髄指数15~27)。

以上の所見より資料毛髪はヒトの頭髪であり, 同一人に由来するものと判定された。

4) 走査型電子顕微鏡による形態学的検査

資料毛髪の両側端部は亀裂が入り分裂したような状態(写真7)あるいは毛小皮の一部を残し皮質部が欠損したような状態(写真8)が認められる。また毛幹部では, なんらかが付着したような状態, 小孔のあいたような状態(写真9, 10)であり一般正常頭髪に認められる小皮紋理は存在しない。

資料毛髪の横断面では写真11に示すように, その外層に毛小皮と思われる厚さ(1.4~2.7 μm)の層が観察された。

以上の所見より資料毛髪は側端部および表面部がかなり劣化しているものの, 毛小皮は存在していることが確認された。

5) X線マイクロアナライザーによる元素分析

エネルギー分散型X線マイクロアナライザーによる資料毛髪の元素分析結果を写真12に示す。

資料毛髪からは一般正常頭髪の常在元素である硫黄の他に, アルミニウム, ケイ素, カリウム, カルシウム, 鉄, 銅等が検出された。これら一般正常頭髪から検出されない元素は, 毛髪に付着していた土砂成分(写真13)に由来するものと考えられる。

6) 血液型検査

抗体解離試験法により資料毛髪の血液型検査を行った結果, ABO式のA型と判定された。

7) まとめ

今回発見された毛髪様のものは, ヒトの頭髪であり同一人に由来するものであると判定された。なお毛髪の血液型はA型である。

この毛髪は, 側端部及び表面部がかなり劣化(写真7~10)し, 元素分析においても一般正常毛髪には存在しない元素が検出されており, 正常な毛髪の状態を備えているとはいえない。しかし, この毛髪は肉眼及び光学顕微鏡による形態学的所見により容易にヒトの頭髪と判定され, また血液型検査も可能であった。これは約500年にも及ぶ時間的経過にもかかわらず, 硬タンパクで形成される毛小皮が存在(写真11)しうる環境下に置かれていたことにより, 毛髪内部(皮質部)を保護していたためと考えられる。

第2表 毛髪の形態学的検査

資料番号	長さ(cm)	形状	色		太さ(μm)		鱗質の出現形態	両端の形態
			肉眼的	顕微鏡的	先	幹		
1	2.4	弧状	茶褐色	茶褐色	80	70	ほぼ連続状 (一部観察困難)	毛先 毛根
2	2.2	弧状	褐色	褐色	55	60	点断続状	毛先 毛根
3	2.0	弧状	褐色	褐色	60	80	点断続状	毛先 毛根
4	1.7	弧状	茶褐色	茶褐色~褐色	90	85	ほぼ連続状 (一部観察困難)	毛先 毛根
5	2.2	弧状	茶褐色	茶褐色	90	100	点断続状~連続状	毛先 毛根
6	2.5	弧状	茶褐色	褐色	65	80	通続状	毛先 毛根
7	2.3	弧状	茶褐色	茶褐色	75	80	ほぼ連続状	毛先 毛根
8	2.3	弧状	褐色	褐色	60	65	点断続状	毛先 毛根
9	1.9	弧状	茶褐色	褐色	80	80	点断続状	毛先 毛根
10	2.3	波状	茶褐色	茶褐色~褐色	70	75	点断続状~連続状	毛先 毛根

第3表 血液型検査

抗血清		抗 A	抗 B	抗 H	判定
作用血球		A 型	B 型	O 型	
資 料	对照 A 型毛髮	+	-	+	A
	对照 B 型毛髮	-	+	+	B
	对照 O 型毛髮	-	-	+	O
	資料毛髮	+	-	+	A

2 大庭下黒田遺跡の地形・地質と考古学的二・三の知見

島根大学教授 三浦 清

1) まえがき

大庭下黒田遺跡をめぐる地質と若干の考古学と関わる点について述べてみたい。

2) 下黒田遺跡の地質

下黒田遺跡はいわゆる中位段丘上に位置する遺跡である。

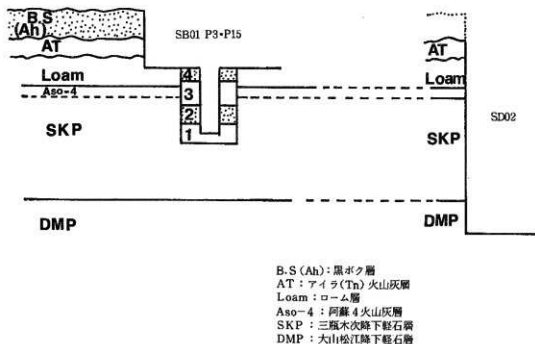
意宇川低地はその南側をこの段丘を開析して発達し、その北西側は馬橋川によって切られている。

下黒田遺跡はこのような過程における残丘の平坦面に構築されたものである。

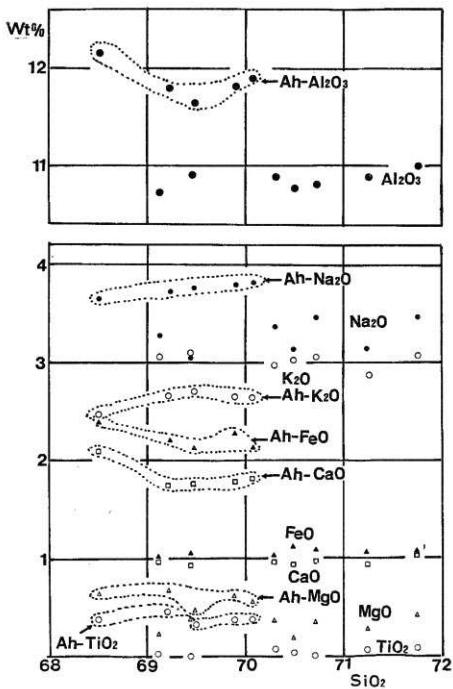
段丘を構築する地質は、段丘砂礫堆積物とこれをおおう火山性堆積物からなっている。

火山性堆積物の最表層を構成するものは見かけ上黒色を呈するいわゆる黒ボクである。

第28図のB・S (Ah) と示されるものがそれに相当する。その中には多量の火山ガラス (Bubble wall 型) が含まれる。E P M A による分析結果が第29図に示してある。図中で



第28図 下黒田遺跡の地質断面



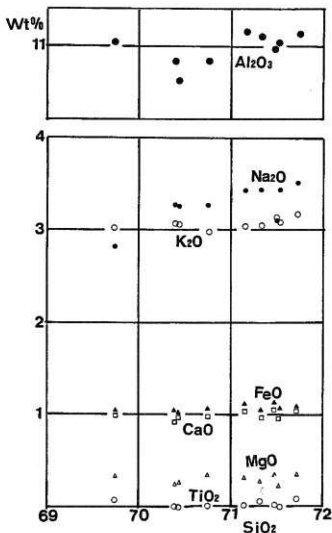
Ah : アカホヤ火山灰起源のもの

第29図 下黒田遺跡附近の黒ボク層に含まれる火山ガラス

Ah で示されるものはアカホヤ火山灰 (Ah) 起源のもので他はすべてアイラ火山灰 (AT) 起源のものである。この分析に基づく火山ガラスの同定はすでに三浦・林 (1985) が示したところである。つまり、この黒ボクの中にはアイラ火山灰とアカホヤ火山灰が混入していることを示すのであるが、アイラ火山灰は約 2.2 万年以前に九州の鹿児島湾に近い場所での火山活動により噴火、降灰したものである。アカホヤ火山灰は 6000 年以前頃に鹿児島 (鹿児島) 附近からの火山噴火で降灰したものである。このようなことを考えると黒ボクはこのアカホヤ火山灰を含むことから少なくともおよそそのところ 6000 年以降の堆積物と考えられる。ただ、

この黒い色は特別のもので、気候との関わりで植生との反応をとおして生じたものとみられる。6000 年前後といえは縄文時代であり、日本列島はかなり高温多雨の気象条件下にあったわけで、一説にはススキの繁茂がその生成と関わっていると考える人もある。

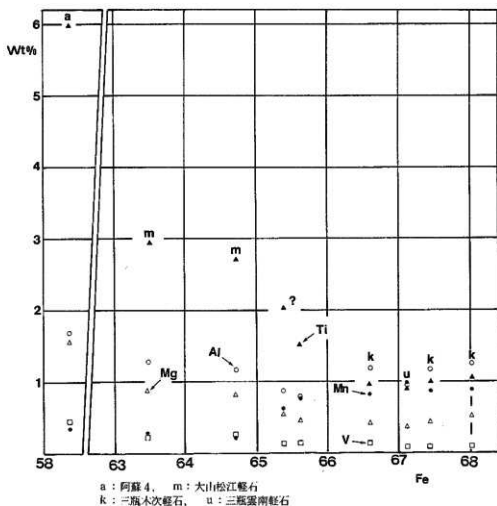
黒ボク層の下位には同じく Buble wall 型の火山ガラスを多量に含有する層準がある (第30図)。第29図との大きな違いは Ah 起源のガラスを含まず、この層準に含まれる大量の火山ガラスはすべてアイラ火山灰 (AT) 起源に限られる。多少の



第30図 下黒田遺跡附近の黒ボク層直下のアイラ Tn 火山灰層に含まれる火山ガラス

地層の乱れはあるものの、この層準はアイラTn火山灰層に対比されるものである。

このアイラTn火山灰層の下位にはローム層がある。殆んど二次的堆積物で占められるものである。このローム層に連続するものは、表層土を除去された遺跡の柱跡の最上層に対比される。第31図はこのローム層に含まれる磁鉄鉱のEPMA分析結果を示したものである。図中、aの記号で示すものが阿蘇4火山灰起源、mが大山松江降下軽石層(DMP)起源、kが三瓶木次降下軽石層(SK P)起源、uが三瓶雲南降下軽石層起源にそれぞれ対応するものである。?記号を付したものは起源不明であることを示す。つまり、殆んど第28図で示すこのローム層よりも下位の層準のものが含まれ、それが前述したとおり、二次的堆積物であることと一致する。



第31図 下黒田遺跡ローム層に含まれる磁鉄鉱の化学組成(第28図参照)

アイラ Tn 火山灰層にしても、ローム層にしてもその厚さは20~30センチメートルにすぎないが、これらの下位にくる三瓶木次降下軽石層(SKP)や大山松江降下軽石層はいずれも1メートル以上もある厚い降下軽石層である。ただ、三瓶木次降下軽石層と前述のローム層の間には後述するような特殊な化学組成からなる磁鉄鉱を多量に含む層がある。このような磁鉄鉱は林・三浦(1986)が示した阿蘇4火山灰の磁鉄鉱と一致し、阿蘇4火山灰の降灰年代70000年とはよく調和している。この層はかなり乱れており、降下時の状況とはかなり異なっているものと考えておく必要がある。

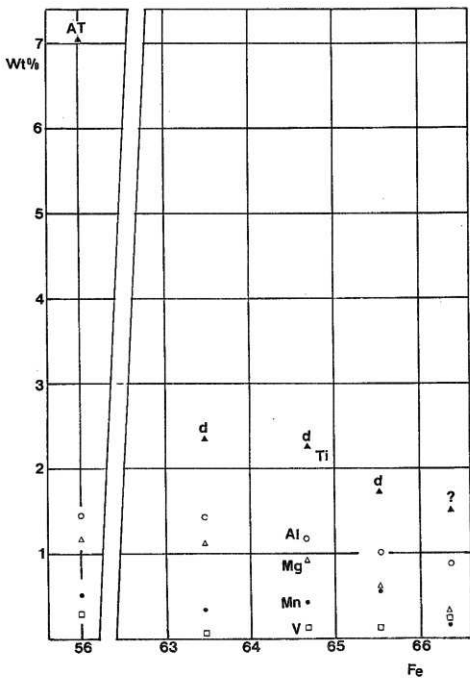
阿蘇4火山灰の下位には三瓶木次降下軽石層がある。俗にミソミチとも呼ばれ、風化軽石の特徴をよく示している。厚さは1メートル以上もあって、2メートル近い部分もある。その下位にはマンガン層をおいてやや粘土化の著しい軽石層がある。これは大山松江降下軽石層に対比されるものである。

遺跡の中で掘られた溝状の構造物は大山松江軽石層の一部にまで達しており、柱を埋めたと考えられる穴は三瓶木次軽石層部分で掘削は終わっている。

3) 柱の埋め込み材とその構造

柱を埋め込むために掘削された穴はほぼ1メートル四方のもので深さもそれに近く、ほぼ80センチメートル程度のものが多い。一本一本の柱穴ごとに、柱を埋めた土の材料は第28図に示したように性質を異にする数枚の上層を積み重ねて、一層ごとによく締め固められている。この図で示される最下部の1層はその中に含有される磁鉄鉱をEPMA分析した第32図から、阿蘇4火山灰層部分を使っていることがわかる。また、2層は明らかに黒ボク層を使っていることは明瞭で、前述の第29図で示したような火山ガラスを含むし、また第33図に示すような磁鉄鉱を含んでいる。ATの記号で示すものはアイラ Tn 火山灰起源のもの、dの記号のものは大山起源の磁鉄鉱である。3層は第34図で示すような磁鉄鉱を含む土である。これは三浦・林(1986)が示した三瓶木次降下軽石層中の磁鉄鉱によく一致し、この土が三瓶木次軽石層を材料としていることを示す。最も上層に使われた土層である4層は再び黒ボクが使用され、それに含まれる磁鉄鉱の性格は第35図に示される。2層のものと殆んど類似しているのは当然であろう。

以上のように柱を埋めるに際して土を層状に締め固めながら積みあげていることは事実である。その時に使用した土は第28図に示すように、穴を掘削して取り出したそのものと附近にある黒ボクが使われている。黒ボクは極めて通気性がよい材料ではあるが一方では締め固めが悪く、阿蘇4は粘性に富んで築き固める程に締まってくる材料である。これを最下部につめ込んでいる意味は読みとれる。三瓶木次降下軽石層はよく風化しているので築



AT : アイラTn 火山灰層
 d : 大山起源のものと考えられるもの

第33図 柱部分埋め込み土材下位から第2層目の黒ボク土層 (第28図参照)

き固めれば比較的締まってくる材料であろう。結局、よく締まる材料とよく乾燥する材料が交互に積み重ねられていることになる。これは一方で力学的強度を保全しながら、他方で防錆に対する思考が払われているとも解される。

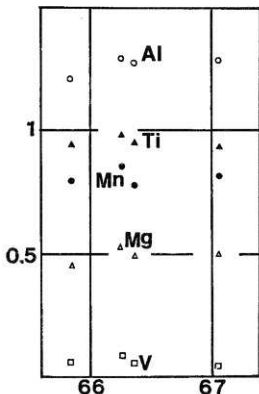
4) 出土した土師器についての鉱物上の問題点

鳥根県内から出土する土師器の起源を求めることも一つの研究問題であろうと思われる。それについてのアプローチのやり方にはいろいろの方法があるにちがいないが、各地出土の土師器について、基礎的資料を出して、それを累積することこそ最も目的に達する近道である。筆者はそのために、それに含まれる鉱物材料、特にその中で特徴的なものがあるかどうかと言う視点からと、土師器そのものの上としての化学組成

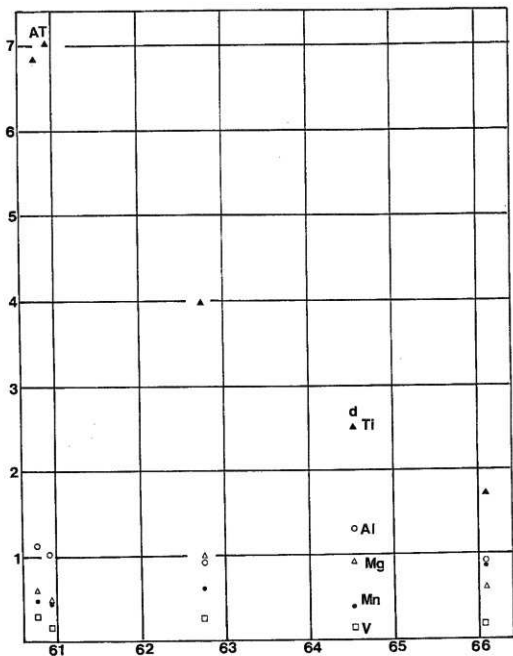
特に斑晶を除いた部分の化学組成を問題にして研究を進める立場をとっている。

下黒田遺跡から出土した土師器には火山ガラスが含まれている。第36図はそのEPMA分析値を示したものである。これは焼成していることからくるH₂Oの除去の点を考えれば、明らかにアイラTm火山灰(AT)起源のガラスで、土師器の土の材料にかなりアイラTn火山灰層が使われていることを示す。第37図には同じく土師器に含まれている磁鉄鉱のEPMA分析値が示されている。この磁鉄鉱は大山西ノ原において、アイラTn火山灰層より上位にあって、黒ボク層の直下の褐色ローム状粘土層に含まれる磁鉄鉱の化学的性質がよく一致している。したがって、土師器の粘土材料を掘削するに際してアイラTn火山灰層とこのような磁鉄鉱を含むローム層が重なって露出しているような場所が選ばれたと考えることが出来よう。このような性質をもつ磁鉄鉱を含むロームは現在のところ、ある種の火山灰と考えると追跡しているが、その起源については明らかではない。大山起源と考えてその分布を追っている。その中から土師器の土の材料の掘削地が推定されるかもしれない。

第4表に土師器の石基部分の化学組成を示す。



第34図 柱部分埋め込み土材下位から第3層目の土層に含まれる磁鉄鉱

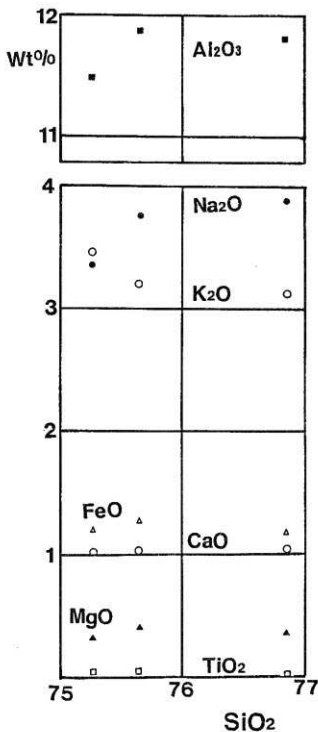


AT : アイラTn 火山灰層
 d : 大山起源のものと考えられるもの

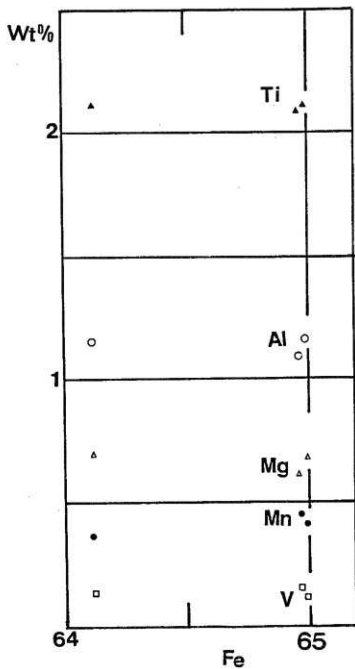
第35図 柱部分埋め込み土材最上部の黒ボク土層 (第28図参照)

5) おわりに

大庭下黒田遺跡について、その地形・地質的背景と若干の考古学的知見に触れた。御参考になれば幸いである。



第36図 土師器に含まれる火山ガラスの化学組成



第37図 土師器に含まれる磁鉄鉱の化学組成

第4表 下黒田遺跡出土土師器の化学組成(石基部分)

	(1)	(2)	(3)
SiO ₂	55.36	53.45	54.20
TiO ₂	0.89	0.85	0.88
Al ₂ O ₃	19.33	19.26	18.70
Fe ₂ O ₃	4.81	4.50	5.88
MnO	0.00	0.00	0.00
CaO	0.18	0.19	0.12
MgO	0.39	0.53	0.45
Na ₂ O	0.95	1.04	0.74
K ₂ O	1.20	1.24	1.21
P ₂ O ₅	0.66	0.80	0.82
S	0.41	0.36	0.45
Cl	0.04	0.06	0.01
H ₂ O	15.79	17.71	16.54

文献

- 三浦 清・林 正久(1985) : 山陰ならびにその周辺地域にみられるアイラ火山灰(AT)およびアカキヤ火山灰(Ah)の火山ガラスの化学的特性, 『山陰地域研究(自然環境)』第1号 71-80 (島根大学).
- 林 正久・三浦 清(1987) : 三瓶火山のテフラの層序とその分布, 『山陰地域研究(自然環境)』第3号 43-66 (島根大学).
- 三浦 清・林 正久(1987) : 火山活動史からみた三瓶火山の鉱物特性, 『山陰地域研究(自然環境)』第3号 67-94 (島根大学).

V. 小 結

1. 出土遺物の検討

本遺跡からは大量の遺物が出土したがこの内、各遺構の時期を決定づける遺物についてのみ簡単に触れたい。

これらの遺物を列挙すると、SB03P9出土の土師質土器（第6図(3)）、SD01・02の最下層から出土した土師器の甕・瓶の把手、須恵器の坏蓋・高台杯・無高台杯・甕（第12図(8)～(9)、第14図(1)(10)(11)）、SD03の底部から出土した布志名焼小焼碗（第15図(2)）、陸橋状遺構とSD06から出土した須恵器の高台杯・無高台杯（第18図(2)(4)）、SK01の備前焼壺（第17図(8)）、SK02の美濃焼灰釉小皿（第20図(1)）であった。

まず須恵器について触れたいが、今日編年基準が最もしっかりしていると思われる「高広遺跡」をここでは参考にしたいと思う。²⁶⁾

坏蓋は口縁端部しか出土していないが、それはかえりがなくなり口縁端部が直立するものである。これは高広のⅢB期～ⅣA期、つまり7世紀末～8世紀後半に該当するものであろう。

高台杯は底部を回転糸切り未調整と回転糸切り後ナデ調整を施しているものがある。高台ははまだ底面外周部に移動しておらず、坏部もやや丸味を帯び口縁部が屈曲する特徴を有する。これは高広ⅢA～ⅣA期、つまり7世紀中葉～8世紀後半に該当するものであろう。

無高台杯は、A)坏部が直線的に立ち上がるもの、B)坏部が丸味をもち口縁部が屈曲するものに2分類できるが、A)B)とも底部は回転糸切り未調整である。これは高広ⅣA～ⅣB期、つまり8世紀中葉～9世紀前半になるであろう。すなわち、SD01・02・陸橋状遺構とSD06から出土した須恵器の時期は、高広ⅣA期の8世紀中葉～後半（8世紀後半代）におくのが妥当であろう。

SD03出土の布志名焼小形碗についてであるが、布志名焼とは、船木与次兵衛村政の子が1750年以降に始めたものであることから²⁷⁾、この碗は18世紀代に位置づけられると思われる。また、SK01の備前壺は玉縁口縁などから備前Ⅳ期、すなわち15世紀後半頃のものに²⁸⁾、SK02の美濃焼灰釉小皿は16世紀頃に²⁹⁾なるものと考えられる。

次に土師質土器であるが、土師質土器の編年の研究は近年やっとなされるようになったにすぎず³⁰⁾、このため本遺跡出土の土師質土器は唯莫然と“中世”のものと言わざるを得ない。但し、SK05出土のそれは富田城関係の遺跡で類例がみられるということであり³¹⁾、

中世の中でも近世に近い時期と思われる。SK01出土の多数の土師質土器は、その出土状況からみて一括資料であり、今後の中世土師質土器の編年的研究の一般資料となりうるであろう。つまり、SK01出土のそれは大形品と小形品とに分類できる。大形品は、底部から直線的に外方に立ち上がり口縁端部は丸い。底部内面は凹んで器厚が薄くなっており、底部外面には回転糸切り痕が明瞭に残っているものである。小形品は、底部から直線的に外方に立ち上がるが、この器厚は大形品よりも厚い。底部内面は平坦であり、外面には回転糸切りの後のスノコ状痕と思われる板状びれが明瞭に残っている。このような特徴をもつSK01出土の土師質土器は、15世紀後半頃のものであり、中世の土師質土器の編年的研究の一つの空白部分を埋めるものと考えられる。

2 遺構の検討

a 古代関係

本遺跡で検出された遺構は、掘立柱建物跡が7棟・溝状遺構が7条・土壌が5基・井戸状遺構が4基であった。このうち切り合い関係から新古関係が確実に言えるものを整理すると、

(古) (新)

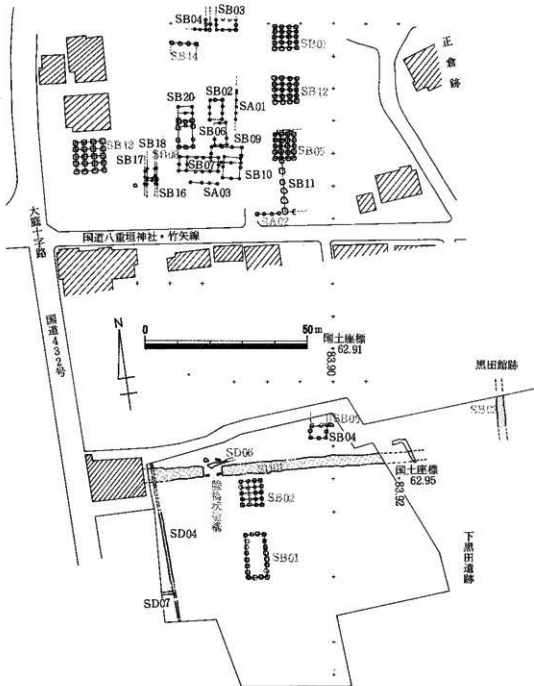
- 1) SB04 → SB05
- 2) SD07 → SD04 → SD02
- 3) SE03・04 → SD02

となる。これを踏まえて、各遺構を検討してみたい。

まず、(a)棟方位 (b)規模 (c)柱間寸法 (d)柱掘り方の規模や形状 (e)出土遺物を分類の指標として⁵²⁾掘立柱建物を検討すると、SB01・02・04・05とSB03・06・07に分類できる。そして、前者のN-3°-E~N-9°-Eという棟方位・2~2.96mという柱間寸法・方1mの隅丸方形のプランを持ち互層状に裏込め土を詰めるやり方という特徴は、出雲国府跡や正倉跡などのそれと極似する。つまりSB01・02・04・05は古代官衙に関係する遺構と言える。

一方、SD01・02・陸橋状遺構とSD06(以下「SD01等」とする)、04は直線的で50m以上の長さを持ち、V形の断面形態を呈しており、この特徴は、出雲国府跡のSD04・05などのそれと類似する⁵³⁾。また、SD01等、07の主軸方位はN-88°-W~N-89°-Wを計り、SB01・02・05の棟方位とほぼ直角をなし、企画性に富んでいる。さらに、陸橋状遺構の北側東西の三回建て替えをしたと思われる柱穴を門址と

すれば、そのような例は岡山県宮尾遺跡⁵⁸などの古代官衙遺跡にしか認められないことから、SD01等、04、07もやはり古代官衙に關係する遺構であろう。このように検討していくと、本遺跡の古代關係の遺構の殆んどは官衙に關係するものであるということが



第38図 下黒田遺跡周辺の古代関係遺構位置図

分る。

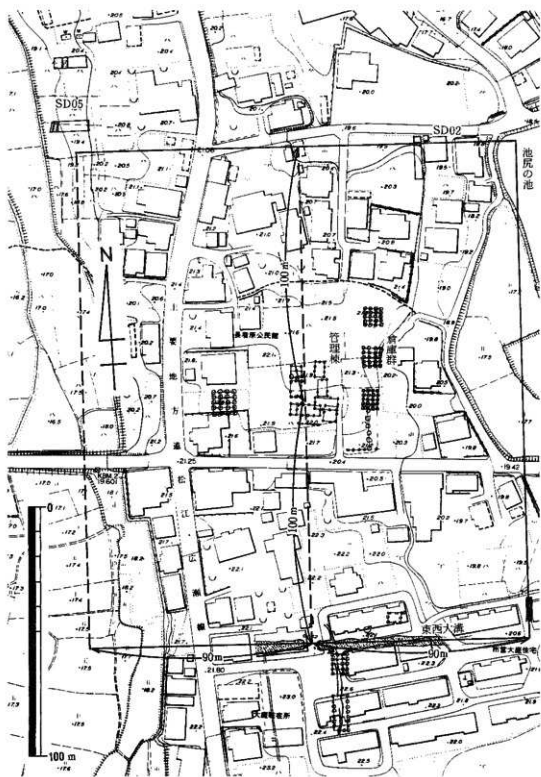
次に、これらの官衙跡とした遺構と北側に隣接する古代官衙遺跡である正倉跡との関係についてみたい(第38図)。

まず、両遺跡の掘立柱建物跡の諸特徴が極似する。また、陸橋状遺構の中心を真北方向に延長すると正倉跡の管理棟と思われるSB08付近に至り約100mの距離を計る。一方、本市教育委員会が昭和58年度に発掘調査した「黒田館跡」でSD03という、主軸が真北に対しN-9.5°-Wで、上端幅2.7m、下端幅2m、深さ70cm、断面がU形を呈する溝状遺構が検出され、この溝中より8世紀後半～9世紀後半頃の須恵器が出土している³⁵。このSD03と本遺跡のSD01等の角度は、91.5°つまりほぼ直角をなしているし、その距離は約90mを計るし、双方の遺構からはほぼ同時期の遺物が出土している。よって連断はできかねるが、双方の溝状遺構は同一の溝の可能性が高く、そうすればSD01は北方に曲がると思われる。つまり、本遺跡の古代官衙遺構は北側に隣接する正倉跡と非常に強い関係、換言すれば正倉跡の一部と考えられ、SD01等は正倉域の南側を区画する東西大溝で、陸橋状遺構の門址はその南門であろうと思われる。また、SD04・07も方位・形状などの特徴より出雲国府跡でも確認されている区画用小溝と考えられる。

さて、本遺跡のSD02の続きについてであるが、陸橋の中心から西方へ約70m行くと比高差が4～6m程もある自然段丘の崖になり、その崖下は現在水田地帯となっている。ということは、西方へは東方と同じ長さの90mはとれず、大溝はこの崖で消滅している可能性が高いと思われる。これらの関係をまとめたのが第39図である。また正倉跡で検出されたSD02(東西溝)を北限域とすれば、南北方向約200m、東西方向約180mの範囲が推定されるし、正倉跡で検出されたSD05もこれらに何か関係する溝と思われる。

一方、SD01等が正倉域の南限とすればその南側に立地するSB01・02はどのような性格になるのだろうか。「出雲国風土記」には「山代郷、郡家西北三里一百廿步、所造天下大神大穴持命御子山代日子命坐。故云、山代一也。即有二正倉。」とあり、正倉以外の官衙と言え山代郷庁の可能性が浮かんでくるが、今回の調査は小規模なため正確なことは今後の調査・研究に委ね、ここでは可能性の指摘に留めたい。

さて、正倉跡ではA・B・Cの三期の造営時期を考えておられるが³⁶、本遺跡では溝状遺構が三時期に、掘立柱建物跡が二時期に切り合い関係から分けられ、前述のようにSD01等はSB01・02・05とほぼ同時期の8世紀後半代と思われ、正倉跡のA期とほぼ同時期になるであろう。しかし、それらより古いSD04・07・SB04の詳細な時期については不明であり今後の調査・研究に委ねたいが、郡衙成立の上限は一般的に7世



第39図 正倉城推定図

紀末～8世紀初頭と考えられていることより⁶⁷⁾、これらの時期は7世紀末～8世紀初頭から8世紀後半頃の間になるのではなかろうか。

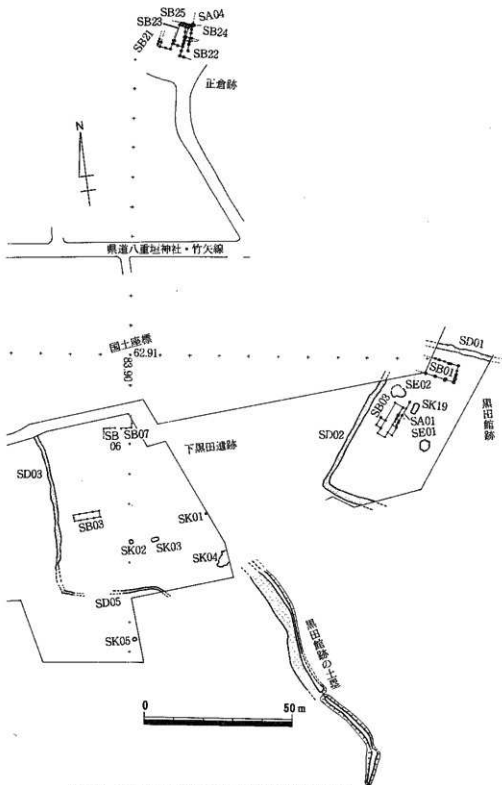
b 中世以降関係

前述の結果、SB03・SK01・02・04・05が中世に、SD03・05が近世に、各々位置づけられるであろう。しかし、SB06・07・SK03は遺物が全く伴わないために時期不明と言わざるを得ない。

さて、本遺跡の東側に中世の「黒田館」が隣接しており、この遺跡から数棟の建物跡や溝状遺構などが検出され、15世紀後半～16世紀代の遺物を出土した。そして現在も本遺跡の南東調査区外(辨授寺の竹林)に距離約70mの土塁と溝の痕跡が明瞭に残っている。本遺跡の中世遺構で黒田館跡の年代と合うものはSK01・02であり、SK02はこの頃の土墳墓であろう。一方、SK01はモミガラ・土師質土器・人毛・和鏡・銭貨というセット関係より鎮物の可能性が高いと思われる⁶⁸⁾。また、SK01・02以外の遺構、例えばSB03と黒田館跡との関係などの詳しい性格は不明と言わざるを得ない(第40図)。

本遺跡から検出された多くの遺構は、正倉跡の一部と思われる古代の遺構とそれ以降の遺構とに時期的に分けられた。そして古代遺構は、今後古代出雲を究明していく上で非常に重要なものと考えられる。このような重要な遺構が検出されたために、松江市建築課と協議をした結果、SB01・02の二棟の掘立柱建物跡が緑地広場の地下に、またSD01等の東西人溝は駐車場の地下に各々保存されることになった。

昨今県内でも保存問題が問われているがただ保存すればそれで済むと言うのではなく、保存後の活用を考えることが重要であろう。そういう意味で、今日の開発ラッシュというきびしい情勢の中で今回このような遺跡保存ができ、将来に向けて遺産を残したことは、文化財側だけでなく開発側をもとり込んだ遺跡保存として非常に意義深いと思われる。今後は、本遺跡と正倉跡の間の地域はもとより周辺地域が鳥根県教育委員会の「風土記の丘地内整備事業」の一環として計画的に調査がなされ、これらと関連する遺構が確認されれば本遺跡を含めた総合的本格的な遺跡保存が可能となろう。



第40図 下黒田遺跡周辺の中世以降関係遺構位置図

註

- (1) 松江市教育委員会『黒口館跡』1984
- (2) 島根県教育委員会『史跡出雲国山代郷正倉跡』1981
- (3) 山本清他『縄文・弥生遺跡』（『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』1975）
- (4) (3)に同じ
- (5) 穴道正年『島根県の縄文式土器集成』I 1974
- (6) (3)に同じ
- (7) 島根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』IV 1983
- (8) (3)に同じ
- (9) 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』I 1982
- (10) 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館『八雲立つ風土記の丘研究紀要I 弥生式土器集成』1977
- (11) 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』III 1984
- (12) 松江市教育委員会『史跡石屋古墳』1985
- (13) 岡崎雄二郎『松江市井ノ奥第4号墳の調査』（『考古学ジャーナル』120号 1976）
- (14) 門脇俊彦他『古墳（発掘古墳）』（『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』1975）
- (15) 島根県教育委員会『岩屋後古墳』1978
- (16) 島根県教育委員会『島根県埋蔵文化財調査報告書』第VIII集 1977
- (17) 山本清『古墳（未発掘古墳）』（『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』1975）
- (18) 松江市教育委員会『出雲国川跡発掘調査概報』1970
- (19) 前島己基『古代寺院』（『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』1975）
- (20) 島根県教育委員会『出雲国分尼寺第3次発掘調査概報』1976
- (21) 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』IV 1985
- (22) 松江市教育委員会『出雲国造館跡発掘調査報告』1980
- (23) 近藤正『中世上豪閥系遺跡』（『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』1975）
- (24) (1)に同じ
- (25) 近藤正『茶臼山城跡』（『季刊文化財』11号 1970）
- (26) 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984
- (27) 藤間享『布志名巻』（『島根県大百科事典』1982）
- (28) 間壁忠彦『備前』（『世界陶磁全集三集-日本中世-』1977）
- (29) 村上勇氏の御教示による
- (30) 川原和人・桑原貞治『島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓』（『古文化談叢』第18集 1987）
- (31) 川原和人氏の御教示による
- (32) 山中敏史『古代郡衙遺跡の再検討』（『日本史研究』161号 1976）
- (33) (28)に同じ
- (34) 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4 1973
- (35) (1)に同じ
- (36) (2)に同じ
- (37) (3)に同じ
- (38) 鎮物の論考としては、木下密運『中世の地鎮・鎮壇』（『古代研究』28・29号 1984）などがある。また、鎮物のセット関係の中で福穀を伴出する例は、和歌山県の和歌山城天守閣・和歌山城跡

松岡・金剛峯寺大門・鈴木家住宅、福井県の一乗谷中惣地籍や島根県内の隠岐郡宮尾遺跡などが知られている。(松田正昭「和歌山における地鎮・鎮壇の遺構」・水野和雄「中世城郭都市一乗谷における地鎮の建例」(『古代研究』28・29号 1984)、福井県後教育委員会『宮尾遺跡発掘調査概報』1984)

出土遺物観察表(1)

竪立柱建物跡

実測 図号	出土箇所	種類	器形	法 量			特 徴	焼色 成調	胎 土	備 考
				口径	底径	器高				
第6-1	SB01 P12 裏込め土	須恵器	坏 類	-	-	-	底部外面にへら刮り調整	良 青灰色	密 砂粒を若干含む	
6-2	SB02 P10 裏込め土	"	(口縁部)	-	-	-	口縁部は外反して端部は丸い 横ナデ調整	"	密 砂粒を若干含む	
6-3	SB03 P9 底 部	土師質 土器	皿 (底 部)	-	-	-	底部は回転糸切り	善 赤褐色	やや密	
6-5	SB04 P2 裏込め土 検出箇所	弥生式 土器	壺・甕類 (口縁部)	(4.2)	-	-	口縁部外面に3本の凹線文 端部内面は刮り調整	良 黄褐色	白色微砂粒を多く含む	
6-4	"	鉄製品	角 釘	-	-	-				一辺5~6cmの断面が正方形

注) 法量の()は推定

出土遺物観察表(2)

溝状遺構

実測 図号	出土箇所	種類	器形	法 量			特 徴	焼色 成調	胎 土	備 考
				口径	底径	器高				
第12-1	SD01 D-3区	須恵器	坏 蓋	(4.6)	-	-	天井部外面刮り調整 天井部内面多方向ナデ調整 口縁部回転ナデ調整	良 青灰色	白色砂粒を含む	クロロ方向:右
12-5	D-3区 第2層	"	高台付坏	12.9	8.4	5.4	口縁端部は丸い 底部は回転ナデ調整 坏部下半に刮り調整	"	砂粒を含む	クロロ方向:右 底部に爪痕らしきものあり
12-4	R-3区 第1層	"	無高台坏 (底 部)	-	-	-	底部は回転糸切り	"	白色砂粒を多く含む	
12-2	D-3区	"	"	-	(1.4)	-	底部に回転糸切り痕と板目痕あり	"	"	クロロ方向:右
12-3	H-3区 第1層	"	坏 類 (口縁部)	(6.5)	-	-	外傾して立ち上がる体部 口縁端部は丸い 回転による横ナデ調整	不良 暗黄灰色~ 黄褐色	やや密 砂粒をわずかに含む	
12-6	"	"	壺・甕類 (底 部)	-	-	-		良 内面 茶色 外面 暗青灰色	"	
12-9	F-3区 第1層	土師質 土器	皿	-	(5.6)	-	底部より、やや内傾しながら立ち上がる 底部は回転糸切り	良 褐色	やや粗	

注) 法量の()は推定

大 区 区 号	出上脚所	種 類	器 形	法 量			特 徴	顔 色	成 調	胎 土	備 考
				口径	底径	器高					
12-7	F-3区 第1層	十師宜 土器 (底 部)	皿	-	(4.7)	-	底部は回転糸切り	青 灰黄色	やや密 砂粒をわず かに含む		
12-8	H-3区 第1層	"	低脚付杯		7.6	-	高さ1.5cmの外反する 脚をもつ	骨 内面灰黄色 外面 暗灰黄色	"		
12-10	E-3区 第1層	口 磁 瓶	瓶	(19.0)	-	-	内凹しながら立ち上 がり、口縁部付近で外 反する。底部は丸い。 外面にヘラ削りあり。			中国産	
12-11	F-3区 底部より 3層上	須 惠 器	無高台杯	11.9	8.2	4.6	口縁部はくの字状に外 反する。底部内面は不 定方向のナメ調整。 底部は回転糸切り。	良 青灰色	やや密 砂粒をわず かに含む		
12-12	"	"	壺・甕類 (口縁部)	-	-	-					
12-13	"	"	杯 類 (口縁部)	(12.0)	-	-	内凹しながら立ち上 がる。口縁部はとがっ ている。	良 黄灰色	やや附 白色砂粒を 含む		
12-17	D-3区 黒色土 ②	上 師 器	壺・甕類 (口縁部)	(24.0)	-	-	口縁部は極端に外反し 底部は丸い。 頸部内面はヘラ削り調 整	骨 黄褐色～ 暗黄褐色	粗		
12-14	"	"	(口縁部)	(32.4)	-	-	口縁部は極端に外反す る。 頸部内面はヘラ削り調 整	骨 黄褐色	粗	外面の一部にス ス付着	
12-16	"	"	(底 部)	-	-	-	外面にハケ目調整とヘ ラ削り調整	骨 黄褐色～ 暗灰褐色	"		
12-15	D-3区 地5	"	蓋 (?)	(5.1)	-	-	天井部につまみあり	骨 灰黄色	"	手製ね十器	
12-18	G-3区 最下層	須 惠 器	高台付杯	(13.9)	(9.7)	4.4	体部は内凹しながら立 ち上がる 口縁部は直立気味で端 部は丸い 底部は糸切りをナメで 消去	良 青灰色	白色砂粒を 含む		
12-19	ブレハブ製	"	無高台杯	11.9	(7.2)	4.0	体部は外傾しながら立 ち上がる 口縁部は丸い 底部は回転糸切り 底部外面に削り調整あ り	良 灰 色	白色砂粒を 多く含む	ロクロ方向：右	
12-20	D-3区 隠埋取例 最下層	"	(底 部)	-	(8.2)	-	底部は回転糸切り	良 黄褐色～ 暗青灰色	やや密		
12-21	ブレハブ製	"	壺・甕類 (口縁部)	(16.8)	-	-	口縁部は外反する 底部は稜をつくる	良 内面 原色 外面 灰色	やや密 砂粒をわず かに含む		

附 法量の()は推定

実測 図号	出土場所	種類	器形	法 量			特 徴	焼色	成 調	胎 土	備 考
				口径	底径	器高					
第12-22	D-3区 陸奥支所 最下層	土 器	赤・黄類 (口縁部)	-	-	-	口縁部は外反する 端部は丸い	黄 黄褐色～ 赤褐色	粗		
12-23	D-3区 底 部	"	種の把手	-	-	-	直径3.5～4cmの楕円 形の断面	黄 黄褐色	"		
12-24	G-3区	須 恵 器	环 蓋 (10.2)	-	-	-	天井部外面は回転削り 調整	黄 碧青灰色	黄 白色砂粒を 含む	ロクロ方向：右 つまみの痕跡あり	
12-25	D-3区	"	無高台环 (底 部)	(8.0)	-	-	底部は回転糸切り	良 青灰色～灰 色	やや密 砂粒を若干 含む		
12-26	"	"	赤・黄類 (口 縁)	-	-	-	胴部が歪んでいる	良 灰青色～灰 茶色	やや密 砂粒を含む	指定胴部径16cm	
12-27	G-3区	磁 器	碗 (14.6)	-	-	-	染め付け				伊万里系
12-29	F-3区	鉄 製 品	角 釘	-	-	-					長さ10.2cm以上 辺0.7cmの断面 正方形
12-30	"	"	"	-	-	-					長さ16cm以上 辺0.7×0.4cm の断面が長方形
12-28	"	"	不 明	-	-	-	Y字形 端が一方に折れている				
13-1	SD02 R-2区 上 部	須 恵 器	环 蓋	-	-	-	輪状つまみあり 天井部外面回転削り調 整 天井部内面多方向ナゲ 調整	良 青灰色	白色砂粒を 多数含む	ロクロ方向：右	
13-2	C-3区 第1層	"	"	(18.9)	-	-	つまみの痕跡あり 天井部外面に回転削り 調整	"	白色砂粒を 含む	"	
13-8	B-3区 第1層	"	高台付环 (底 部)	(11.7)	-	-	底部は回転糸切り	不良 緑灰色	"		風化が著しい
13-5	C-3区 上面より 20cm下の 黒色上	"	"	-	-	(3.3)	器高が低い 底部は回転糸切り	不良 暗緑灰色	やや密 砂粒をわず かに含む		
13-7	B-2区 第1～ 2層	"	(底 部)	-	-	-	底部は回転糸切り	良 暗灰黄色	やや密 砂粒を含む		
13-4	C-2区	"	無高台环	(12.0)×(8.2)	3.9	-	底部は回転糸切り 口縁部は回転ナゲ調整	良 白灰色～灰 色	白色砂粒を 多く含む	ロクロ方向：右	
13-3	B-3区 灰層中	"	"	(11.8)×(5.9)	2.7	-	口縁部回転ナゲ調整 底部は回転糸切りと回 転削り調整	良 青灰色	白、黒色砂 粒を多く含 む		

(注) 法量の()は推定

実測 測図 号	出土例所	種 類	器 形	法 量			特 徴	焼 色 成 調	胎 土	備 考
				口径 cm	底径 cm	器高 cm				
第13-6	C-2区 ⑦	須恵器	坏 箱 (口縁部)	-	-	-	口縁部は内凹し、端部は丸い 回転ナテ調整	不良 黄灰色	やや密	
13-9	B-2区 上 層	"	赤・櫻類 (胴 部)	-	-	-	肩部はだれており破はない	良 灰 色	やや密 砂粒をわずかに含む	
13-10	B-2区 第1~ 2層	土師質 土器	皿 (底 部)	-	-	-	深い底部をもつ 底部は回転糸切り	青 黄褐色	やや粗 砂粒を含む	
13-11	"	瓦	"	-	-	-	隅切り瓦 内面に捺了のたつき 凹面に市川	良 青灰色~ 灰色	やや密	
13-12	B-3区 No1	須恵器	坏 蓋 13.2	-	-	2.4	擬宝珠のままを付ける 大井部は回転糸切り	良 青灰色	やや密 白色砂粒を 多量に含む	ロクロ方向:右
13-13	" No21	"	"	-	-	-	擬宝珠つまろ	良 青灰色	やや密 砂粒をわずかに含む	
13-17	B-2区 No14	"	高台付坏 (底 部)	-	-	-	底部は回転糸切り	"	やや密	底部に爪痕あり
13-19	C-3区 ⑤	"	"	-	-	(10.1)	貼り付け高台	"	やや密 砂粒をわずかに含む	
13-18	" ⑥	"	無高台坏 (底 部)	-	-	-	底部は回転糸切り	"	密	
13-16	"	"	()	-	-	-	"	不良 灰 色	密	
13-14	B-3区 黒色土	"	坏 箱 (口縁部)	-	-	-	やや内凹しながら立ち 上がる 口縁端部は丸い	良 青灰色	密 白色微砂粒 を含む	
13-15	" 第3層	"	()	-	-	-	"	良 黄灰色	やや密	
13-20	B-2区 ⑧	"	赤・櫻類 (口縁部)	(38.0)	-	-	口縁部は外反し端部は丸い 頸部外面に上下2条の 波状文とその間に沈線 文がある	良 内面白灰色 外面黒灰色	白色砂粒を 多く含む	ロクロ方向:右 自然粘付台
13-22	B・C -3区 No3,8,20	"	(底 部)	(7.0)	-	-	樽円状の丸底である 内外面共に叩き痕が顕 著	良 灰色~ 青灰色	やや密 砂粒をわずかに含む	
13-21	B-3区 第3,4層	"	"	-	-	-	底部に貼り付け高台の 波線あり 内面はナテ調整 外面は叩き調整	良 青灰色	"	

(由 法量の()は推定

実 測 測 号	出上個所	種 類	器 形	法 量			特 徴	焼 色 成 調	粘 上	備 考
				口径	底径	器高				
第13-23	C-3区 No 8	須 悉 器	鍋	(47.6)	-	-	口縁部内面にヘラ状工 具による沈澱文が刷削 する。 胴部に把手らしい痕跡 がある。 体部内外面に叩き調 整。	良 青灰色	やや密 白色砂粒を 所々に含む	
13-24	C-3区	"	提 瓶 (胴 部)	-	-	-	胴部に把手の一部が残 る。 内外両方に叩き調整。	良 灰 色	やや密 黒色砂粒を 含む	外面に自然釉が 付着
13-25	B-2区 No15	上脚實 土器	低脚付杯 (底 部)	-	-	-	脚は貼り付けによる。 底部は回転糸切り。	良 灰黄色	やや粗 砂粒をわず かに含む	
13-27	B-3区 第3~ 4層中	"	"	-	5.0	-	底部から大きく開いて 杯部をつくる。 ロクロによる水挽き成 形。 底部は回転糸切り。	不良 黄褐色	"	
13-25	No12	"	皿 (底 部)	-	-	-	全体に薄い作りである。 底部は平坦な底をつく り外側に体部へとう つる。 底部は回転糸切り。	不良	やや密	底部外面は朱塗 り
14-1	C-3区 十橋西底 部密着	須 悉 器	杯 蓋 (口縁部)	-	-	-	口縁部はやや外反し端 部は丸い。 横ナテ調整。	良 青灰色~ 暗灰黄色	やや密 砂粒を含む	
14-3	B-2区 12	"	高台付杯 (底 部)	-	(9.0)	-	底部は回転糸切り。 高台は貼り付け。	良 淡紫灰褐~ 明灰色	粗 白、黒色砂 粒を含む	ロクロ方向：右
14-4	B-2区 3区 No 5, 6, 10 14	"	"	(19.4)	(11.4) X (3.0)	-	器高が低く盤のような 形態である。 底部は回転糸切り。 一部にヘラ刷り調整。	不良 青灰色~ 白灰色	粗 白色砂粒を 多量に含む	風化が著しい ヒズミあり
14-2	B-2区 (1)	"	"	07.0	(13.2)	6.5	杯部はまっすぐに外傾 しながら立ち上がる。 高台は底部端に貼り付 けられている。 底部は回転糸切り。	良 青灰色	密 白色砂粒を 所々に含む	ロクロ方向：右
14-12	No 6	"	無高台杯 (12.2) X (8.3) X (4.3)	-	-	-	杯部は外傾しながら立 ち上がり一度内彎して 口縁部に至る。 端部は丸い。 底部は回転糸切り。	"	やや密	底部に擦痕らし きものあり
14-5	No11	"	(底 部)	-	-	-	底部は回転糸切り。	"	"	
14-10	C-2区 底 部	"	"	(9.0)	-	-	"	良 黄灰色~ 灰色	やや密 砂粒をわず かに含む	

注 法量の()は推定

実 測 図 号	出土場所	種 類	器 形	法 量			特 徴	塗 色 成 調	胎 土	備 考
				口径	底径	器高				
第14-11	C-2, 3区 底部	須恵器	坏 類 (口縁部)	14.80	-	-	内湾しながら立ち上がり、口縁部では少し直立して端部に至る。端部は断面三角形になる。横ナデ調整。	不良 黄灰色		
14-14	B-2区 No 4	"	"	(13.2)	-	-	坏部はやや外傾しながら立ち上がる。口縁端部はやや丸い。	良 青灰色	やや密	
14-8	ビツ 検出面	"	"	-	-	-	坏部は外傾しながら立ち上がり一度内湾してからまた外反する。口縁端部は丸い。	良 暗黄灰色		
14-7	No11	"	"	-	-	-	坏部は外傾して立ち上がる。口縁端部は丸い。		やや密 砂粒をわずかに含む	
14-9	B-3区 ビツ 検出面	"	"	-	-	-	口縁部は一度内湾してから外反する。口縁端部は丸い。	良 青灰色	やや密	
14-6	B-2区 No 6	"	"	-	-	-	口縁部は外傾しながらまっすぐ立ち上がる。口縁端部は丸味を欠く。	良 暗灰色	やや密 砂粒をわずかに含む	
14-13	No22	"	"	-	-	-	口縁部は外傾しながら立ち上がる。口縁端部は丸味を欠く。回転ナデ調整。	良 青灰色～ 暗黒灰色	やや密 砂粒を含む	
14-15	下 層	"	横 瓶 (肩 部)	-	-	-	内外面は叩き調整顯著	良 緑黒色～ 黒灰色	やや密 砂粒をわずかに含む	
14-16	上層から 15cm上	"	坏 蓋 (口縁部)	-	-	-	口縁部はわずかに屈曲する。	良 暗灰色	やや密	
14-17	B-2, 3区	"	高台付坏	14.8	(11.2)	4.7	坏部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸い。底部は回転糸切り。	良 青灰色		
14-20	"	"	無高台坏	-	-	4.0	体部は内湾丸味に立ち上がる。端部はやや丸い。底部外面は削り調整か？			

(注) 法量の()は推定

発掘 調査 図号	出土場所	種類	器形	法 量			特 徴	焼 色 成 調	胎 土	備 考
				口径 cm	底径 cm	器高 cm				
第14-18	C-3区	須恵器	黒高台杯	(12.8)	(8.6)	3.7	杯部は外傾しながら立ち上がる。 口縁部は丸い。 底面は回転糸切り。	良 青灰色	やや密	
14-19	B-2, 3区	"	杯 類 (口縁部)	-	-	-	外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。 端部は丸い。	不良 灰黄色～ 暗灰黄色	やや密 砂粒をわず かに含む	
14-21	C-3区	"	壺・甕類 (胴 部)	-	-	-		良 灰色～ 暗灰色	"	頸部径8.8cm
14-22	C-2区	"	(")	-	-	-		良 灰色～ 黄灰色	やや密	
15-2	S D 0 3 D-6区 底 部	陶 器	碗	-	4.2	-	直立の高台が付く。 黄色の施釉	良		布志名焼 内外面共に貫入 あり
15-3	D-3区 上端より 40cm以下	土 師 器	杯 類 (底 部)	-	-	-	底面から内側しながら 立ち上がる。	骨 褐 色	やや密 砂粒をわず かに含む	風化が著しい
15-1	D-3区	須恵器	杯 類 (口縁部)	(16.6)	-	-	体部は外傾して立ち上 がる。口縁部は丸い。 回転による傾ナデ調整	不良 褐灰色～ 黒灰色	やや密 砂粒をわず かに含む	
15-4	D-2区 第1層中	"	壺・甕類 (底 部)	-	(11.4)	-	底面はへう削り調整	良 青灰色 ～灰色	粗 白色砂粒を 多量に含む	
15-5	D-3区 瓦葺り中	陶 器	"	-	-	-	肩部に棒状工具による 凹線あり			アメ色の釉色
15-6	D-4区 灰褐色	"	"	-	(20.0)	-				石見焼系
15-7	D-3区 瓦葺り中	磁 器	徳 利	-	5.5	-	上げ底			
15-8	D-4区	鉄 製 品	角 釘	-	-	-				辺0.9cmの断面 正方形 長さ7.6cm
16	S D 0 4 B-4区 検出面	須恵器	長頸壺	8.5	8.3	22.8	高台を貼り付ける。 頸部に2条の沈線文を 施す。 胴部下半と底面は回転 削り調整	良 青灰色	やや密	

器 法量の()は推定

出土遺物観察表(3)

陸橋状遺構 SD06

大 番 号	河 区 号	出土場所	種 類	器 形	法 量			特 徴	焼 色	成 調	胎 土	備 考
					口径	底径	器高					
18-2		陸橋状遺構 C-3区 陸橋地山 面 No33	須恵系	無高台杯	12.0	(6.3)	(4.0)	杯部は内西しながら立ち上がる。 口縁部は外反し端部はやや丸い。 底部は回転糸切り。	良 灰 色		白、黒色砂粒を含む	ロクロ方向；右
18-1		D-3区	"	高台付杯 (底 部)	-	-	-	高台が底端部に付く。	良 青灰色		やや南	
18-4		C-2区 地山面 ②	"	()	-	-	-	底部は回転糸切り。	良 暗青灰色		"	
18-3		C-3区 地山面 ③	"	()	(7.8)	-	-	高台が底端部に付く。 底部は横ナデ調整。	良 青灰色		"	
18-5		D-2区 地山面 ④	"	無高台杯 ()	-	-	-	底部は回転糸切りか？	"		"	
18-6		⑤	"	壺・甕類 (胴 部)	-	-	-	口部に1条の沈線文を施す。	良 暗灰色～ 灰色		所 砂粒をほん のわずかに 含む	
18-7		第2群	土器器	(口縁部)	24.0	-	-	口縁部は外方へはほぼ直 角に折れ曲がり丸い端 部で終わる。 頸部内面はヘラ削り調 整。	黄 黄褐色～ 赤褐色		粗 砂粒を多量 に含む	
18-9		SD06 C-3区 地山面 ⑥	"	杯 蓋	-	-	-	つまみの痕跡がある。 天井部外面は糸切りと 削り調整。	良 暗灰色		やや南	
18-10		第2群	"	高 杯 (脚 部)	-	-	-	外面に2条の凸線あり。	良 青灰色		"	
18-8		C-2区 暗褐色土	"	把 手	-	-	-	ヘラ削りによって断面 六角形状に面取りされ ている。	良 黒 色		南	
18-11		第3群	石 器	スク レーパー?	-	-	-					

⑥は推定

出土遺物観察表(4)

土橋、井戸上遺構

実測 図号	出土場所	種類	器形	法 量			特 徴	焼 色 成 調	胎 土	備 考
				口径	底径	器高				
第20-17	SK01 I-5区 褐色粘質 土	陶器	壺	14.6	18.2	39.5	玉縁口縁、肩部に耳を 貼り付ける。 平底	良 赤褐色	粗 白色砂粒を 多量に含む	ロクロ方向：右 側前後
20-18	備前案内	その他	和 鏡	-	-	-				紫地神樹双葉鏡
20-1	"	上層質 土器	皿	8.1	4.5	1.9	水浸き成形 底面は回転糸切り	良 明褐色	密 砂粒を殆ん ど含まず	ロクロ方向：左 スス油煙付着 底面にスノコ状 痕あり
20-2	"	"	"	8.0	4.5	1.8	"	"	"	"
20-3	"	"	"	"	3.9	2.0	"	"	"	"
20-4	"	"	"	8.2	4.2	1.9	"	"	"	"
20-5	"	"	"	8.0	4.0	2.1	"	"	"	"
20-6	"	"	"	7.9	4.1	1.8	"	"	"	"
20-7	"	"	"	8.2	4.2	2.1	"	"	"	金雲母が底面に に付着
20-8	"	"	"	"	4.3	1.9	"	"	"	ロクロ方向：左 スス油煙付着 底面にスノコ状 痕あり
20-9	"	"	"	"	"	"	"	"	"	ロクロ方向：左 スス油煙付着
20-10	"	"	"	11.9	5.5	2.7	"	"	"	ロクロ方向：左 スス付着 風化著しい
20-12	"	"	"	12.0	5.8	2.9	"	"	"	もろがら付着 スス油煙付着 ロクロ方向：左 底面にスノコ状 痕あり 風化著しい

(注) 法量の()は推定

実 測 図 号	出土例所	種 類	器 形	法 量			特 徴	焼 色 或 調	胎 土	備 考
				口径	底径	器高				
20-13	備前赤内	土師質 土器	甕	11.6	5.0	3.0	水挽き成形 底面は回転糸切り	良 明褐色	密 砂粒を殆んど含まず	大半が風化等によって詳細不明
20-14	"	"	"	(11.5)		2.7	"	"	"	風化剥落が著しい
20-11	"	"	"	(11.1)	(4.2)	2.6	"	良 薄褐色	密 白色微砂粒を含む	"
20-15	"	"	"	(12.5)	(5.7)	"	"	"	"	"
20-16	"	"	"	(11.4)			水挽き成形	"	密 砂粒を殆んど含まず	"
21-1		その他	銭 貨	直径 24 ~ 25	厚さ 1 mm	穴径 6				景徳元宝
21-2	No 10	"	"	25	1	"				祥符元宝
21-3	"	"	"	"	"	7				天聖元宝
21-4	"	"	"	24	1mm	"				皇宋通宝
21-5	"	"	"	"	1	6				元○通宝
21-6	"	"	"	"	"	7				"
21-7	No 3	"	"	"	"	6~7				"
21-8	No 12	"	"	"	1mm	7				天祐通宝
21-9	"	"	"	24 ~ 25	"	6				聖宋元宝
21-20	No 6,7	"	"	24	1	7				"
21-10	"	"	"	24 ~ 25	1mm	6				政和通宝

6) 法量の()は推定

表 番 号	山 土 個 所	種 類	器 形	法 置			特 徴	焼 色	成 調	胎 土	備 考
				直 径	厚 さ	穴 径					
第21-11		その他	銭貨	21~25	1	5					政和通宝
21-12	No 9	"	"	24	1弱	5.5					永業通宝
21-13	No 6	"	"	25	1強	5~6					"
21-14		"	"	"	1弱	"					"
21-19		"	"	24~25	1	7					"
21-15		"	"	25	"	5					"
21-16		"	"	"	1.5	"					"
21-21	No 6, 7	"	"	"	1強	6					"
21-17	No 8	"	"	26	"	5					水口口宝
21-18	No 11	"	"	25	"	4~5					宣徳通宝
21-19		"	"	"	1	6					不明
21-22		"	"	23	"	"					"
21-23		"	"	"	1~1.5	5~6					"
21-24		"	"	24	1	7					"
21-25	2番目	"	"	23~24	1弱	6					山口元口
21-26	No 4	"	"	23	"	"					不明

(注) 法置の()は推定

万 器 番 号	出土場所	種 類	器 形	法 量			特 徴	焼 色	成 調	胎 土	備 考
				口径	底径	器高					
26-2	SK 02 G-6区 第1-2層	土師質 土器	杯 類	—	—	—	水挽き成形 灰褐色～ 黒灰色	良	やや密 微砂粒を多 く含む	細片のため詳細 不明	
26-1	G-6区 上端より 30cm下	陶 器	皿	11.2	(6.3)	2.6	灰色磨釉	良 灰 色	粗	美濃焼灰釉 貫入が大きい 重ね焼きの茶斑 痕あり	
26-3	SK 04 J-7区	土師質 土器	"	—	—	—		良 橙 色	密 砂粒を殆ん ど含まず	風化のため詳細 不明	
26-4	SK 05 F-9区 底面より 10cm上	"	"	11.7	4.5	2.3	外面上半から口縁にか けて回転ナデ その下は指ナデ 内面にナデ切り難し痕 あり	良 白褐色～ 黒灰色	やや粗 白色系微砂 粒を多く含 む	ロクロ方向：左	
26-5	SE 01 上端より 1.5m下	陶 器	盆 鉢	—	—	—	10条以上のクナ方向の 沈線を施す	良 灰色～ 淡茶色	密	備前焼 よく使用したも の	
26-6	SE 02 F-2区 覆上中	磁 器	碗	—	(6.4)	—	底部外面に逆井文 底面内面に見込みの西 線あり 青色磨釉	良 灰色～茶色	"	中野崎青磁	
26-7	SE 04 B-3区 No 23	土師 器	壺	(16.0)	—	(17.0)	口縁端部は丸い 口縁部は外反する 胴部は丸い	不良 赤褐色～ 茶褐色	粗		
26-8	SPB 03 B-2区	土師質 土器	高台付杯	10.6	6.8	2.5	杯部は浅くやや内し ながら大きく開く 貼り付け高台はへの字 状に開く 水挽き成形 底部は回転承切り	青 褐色～ 暗黄灰色	やや密 砂粒をわず かに含む		
26-9	"	"	"	—	6.4	—	水挽き成形 高台はへの字状に開く 底部は回転承切り	"	"		
26-10	B- 2.3区 No 21	"	"	—	—	—	水挽き成形 底部は回転承切り	"	"		
26-11	SPB 04 B-2区	須恵 器 (灰 部)	"	—	(10.4)	—	高台は貼り付けによる 底部は回転承切り	良 暗青灰色	やや密 砂粒をほん のわずかに 含む		

(注) 法量の()は推定

出土遺物観察表(5)

その他

式器 測 図 号	出土場所	種 類	器 形	法 量			特 徴	色 成 調	胎 土	備 考
				口径	底径	器高				
27-1	尾山表採	須恵器	杯	蓋 (15.0)	-	2.3	輪状つまみをもつ。 天井部は削り調整	良 濃青灰色	密 白色砂粒を 含む	ロクロ方向:右
27-2	G-7区 黒色土 表 採	"	"		9.0	-	高台部に台形通し孔が 三方にある。 強いへう削り調整。	良 青灰色	やや密 白色系微砂 粒を多く含 む	朝鮮系土器 自然輪付者
27-3	D-8区 地山面	土師質 土器	皿	(13.6)	-	-	底縁から体部にうつる 所に段がある。 口縁部は丸味をもつ	青 灰黄色	やや密	
27-6	ビット 攪乱塊	"	"	-	-	-	肩任痕あり。	"	"	
27-4	F-6区	"	"	6.8	5.4	1.6	口縁部は外傾してわず かに立ち上がる。 底部は糸切り。	青 灰黄色	密 砂粒をわず かに含む	
27-5	尾山表採	"	"	8.8	5.0	1.2	器高の低い小皿 外に大きく開いて立ち 上がり口縁部は斜め に平坦面をもつ。 底部は回転糸切り。	青 黄褐色	やや密	
27-8	表 採	"	"	8.3	4.8	1.6	底部よりやや内傾気味 に立ち上がる。 底部は回転糸切り。	良 褐色	密	
27-7	東西トレ	"	"	8.8	4.9	1.8	底部から内傾しながら 立ち上がる。 底部は回転糸切り。	良 黄褐色~ 赤褐色	やや密 砂粒を若干 含む	口縁部にス 付者
27-10	D・E・ 5区 S B O 1 Iの攪乱 中	陶 器	徳 利	-	-	-	油粒あり。			滑石質
27-9	S B O 2 のそばの 攪乱塊	"	蓋	9.7	-	2.0	鉄粒 つまみが付く。			
27-12	東西トレ ンチの地 山より15 cm以上	"	筒	-	-	-	灰色の施釉。			周津橋系
27-15	表 採	"	皿	-	5.3	-	高台付き。 鉄粒			
27-11	D-7区 南北トレ ンチ攪乱 塊	"	片 口	-	-	-	黄釉。			布志名焼
27-14	"	"	"	-	8.7	-	"			"

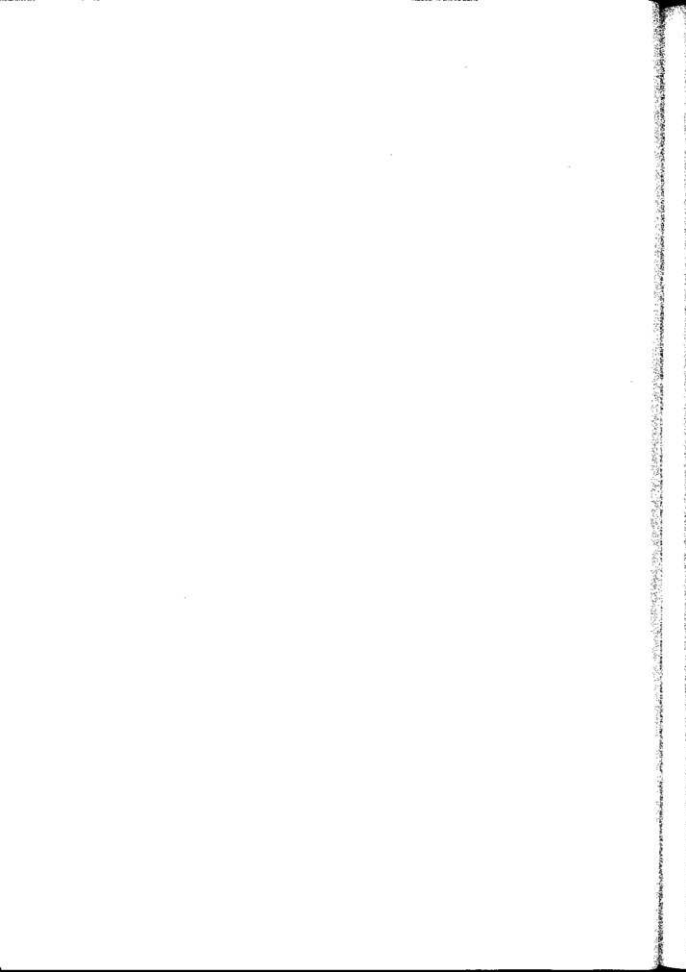
註 法量の()は推定

実 測 区 号	出土場所	種 類	器 形	法 量			特 徴	焼 色	成 濁	胎 土	備 考
				口径	底径	器高					
				cm	cm	cm					
第27-13	F-6区 探 査	陶 器		-	-	-	茶褐色の施釉				
27-16	表 採	*	碗	-	7.8	-	歪み焼きの痕あり 施釉あり				墨子あり
27-19	G-7区 表 採	磁 器	*	-	-	-					中国産青磁
27-17	D-7区 南北トレン チ子探査 壕中	*	*	-	-	-	施釉 染め付け				伊万里焼
27-20	D-8区 表 採	*	*	-	-	-	染め付け				*
27-25	B-5区 表 採	*	壺・変類	16.0	-	-	口縁部は平坦な面をも つ 短く外積する口縁部をも つ				
27-21	D-7区 南北トレン チ子探査 壕中	*	碗	-	-	-	染め付け				伊万里焼
27-24	表 採	*	皿	-	9.5	-	高台付き				
27-18	*	*	*	-	4.5	-	*				
27-23	E-8区 表 採	*	碗	-	5.8	-	施釉				
27-22	黒色土	*	*	-	-	-					伊万里焼
27-27	G-7区 表 採	石 器	石 鏡	-	-	-					黒色玄武岩
27-28	南北トレン チ子探査 壕上	*	スクレー パー?	-	-	-					
27-26	D-7区 南北トレン チ子探査 壕中山土	鉄製品		-	-	-					

（ ）は推定

圖

版

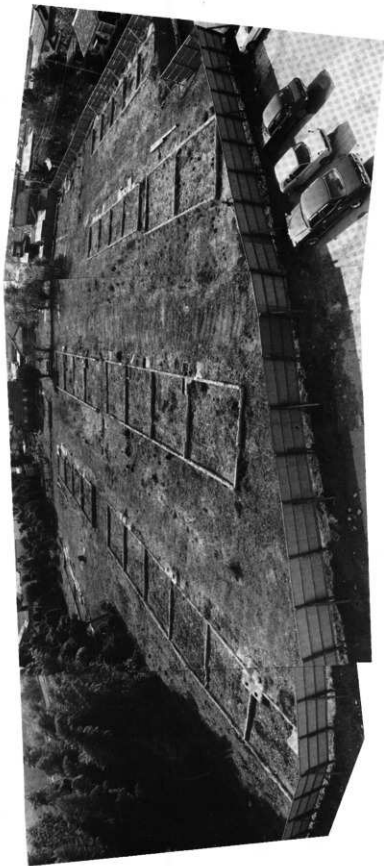




1. 下黒田遺跡遠景（茶臼山中腹より）



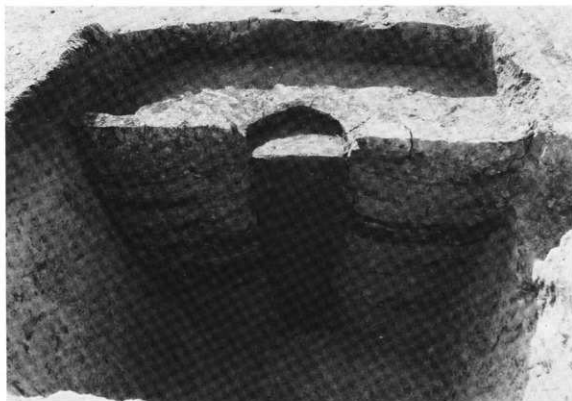
2. 下黒田遺跡発掘調査後近景（北側部分，東から）



3. 下黒田遺跡発掘調査前近景（東から）



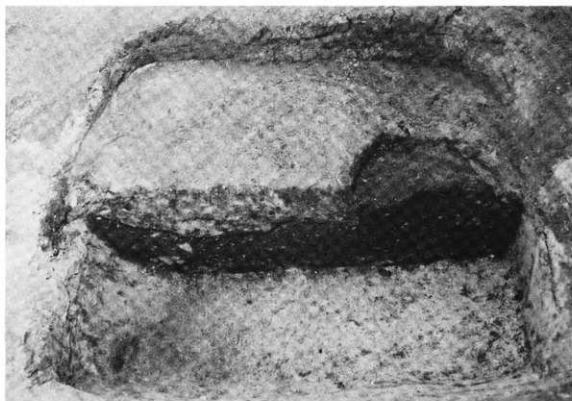
4. SB01全景(北から)



5. SB01-P5柱穴土層断面



6. SB02全景(東から)



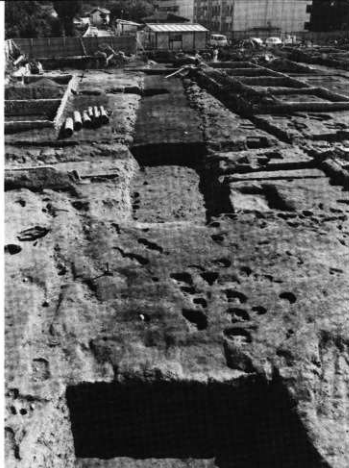
7. SB02-P3柱穴土層断面



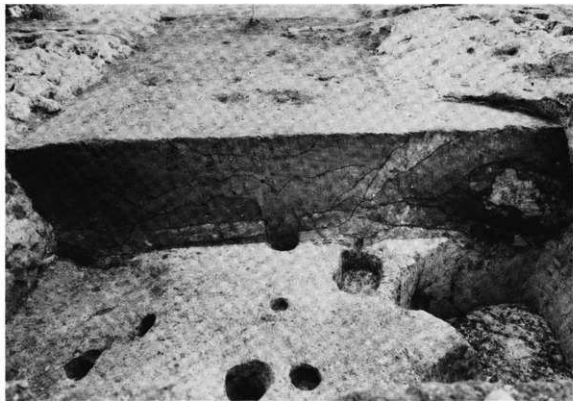
8. SB04・05・06・07全景（南から）



9. SB04-P1とSB05-P1の柱穴切り合い関係



10. SD01・02・
陸橋状遺構近景
(西から)

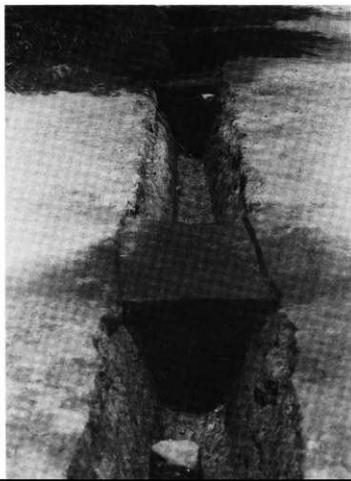


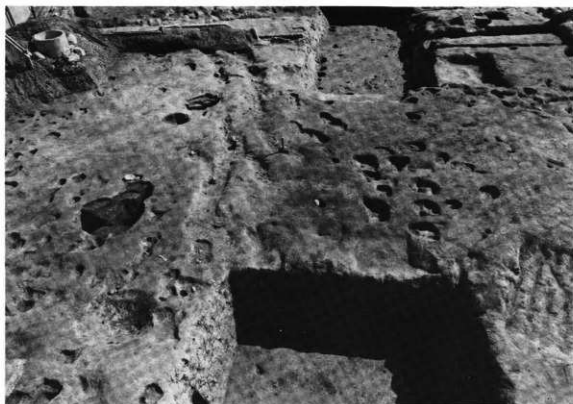
11. SD02とSE03の切り合い関係

12. SD04 近景
(南から)

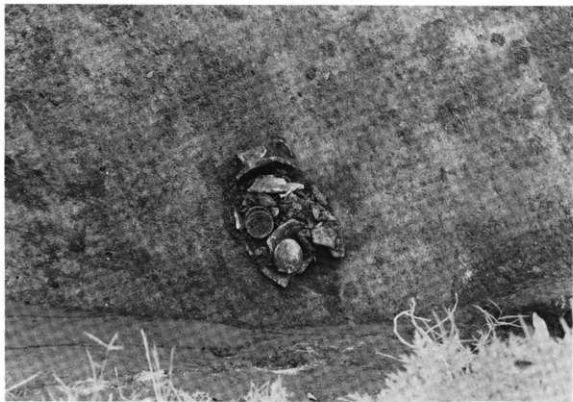


13. SD04 土層断面





14. 陸橋状遺構近景（西から）



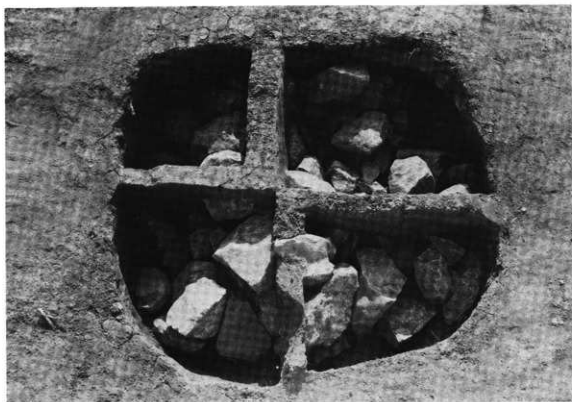
15. SK 01 近景（東から）



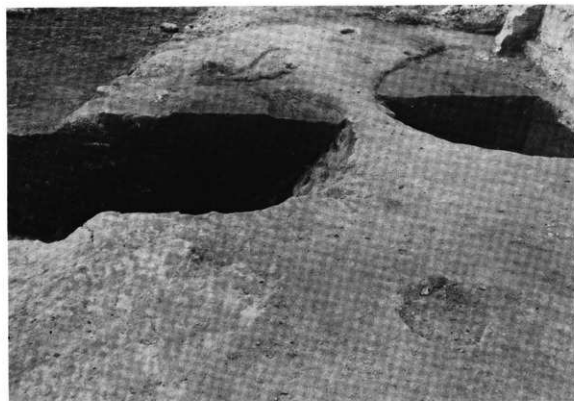
16. SK 01 (土師質土器・和鏡・銭貨の排除後)



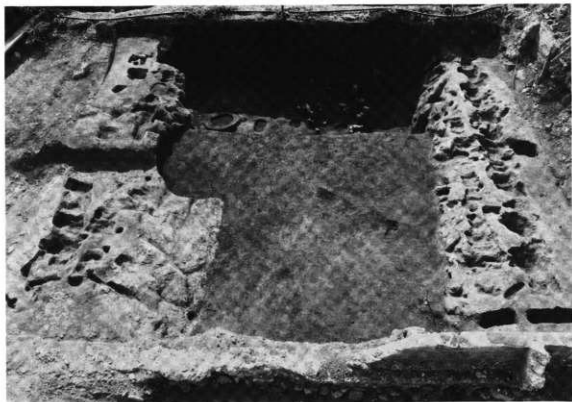
17. 土師質土器・銭貨・稲穀の出土状態



18. SK 0 2 近景 (東から)



19. SE 0 1・0 2 近景 (東から)



20. SE03・04とSD02との関係（東から）



21. 地下保存後の下黒田遺跡（東から）

